
帝国の皇子達

秋山らあれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国の皇子達

【Zコード】

Z8346D

【作者名】

秋山らあれ

【あらすじ】

ルウェイーラの狂氣は、アルディスから笑顔を奪い、無邪気さを奪い、表情までをも奪つた。あの呪詛の言葉を、彼は幾度母親の口から聞かされたのだろう・・・。『最後の王子』過去篇。（完結済み）

1・第四皇子の独白（1）

何時の世も、戦は多くの男達の命を奪い、多くの女達を過酷な運命へと突き落とす。

戦に伴侶や子を取られた挙げ句に殺され、取り残される女達。攻め込まれ、幾人もの飢えた敵兵達に陵辱され、死ぬよりも辛い屈辱を舐めさせられた末に惨たらしく殺される女達。又は、そうなる前に舌を噛み切るか、高みから飛び降りるか、刃物で喉を突く事を選ぶ女達。良く研がれた刃物を懐にしている女は、幸いであろう。そして・・・・、戦の戦利品とされる女達・・・・。死ぬ事も許されず、己の総てを破壊し奪つた男の前に“物”として差し出される。私の父は、そうして責め滅ぼした三国の王女達を、領土と共に帝国の物とし己の物とし、子を産ませた。

三人めの高貴な戦利品に出会った日の事を、私は鮮明に記憶している。私はまだ四つの子供であり、いつもの様に目付役の目を盗み、独りで帝城の広大な庭々を探検していた昼下がりの事だった。追つて来る目付役や、侍女達の目を盗み、私はその頃気に入つて頓に足を運んでいた遊び場へと、その日も足を運ぼうとしていた。そこは使われていなかつた小さな離れの館であり、その頃の私は、隙を見てはその庭で独り遊びをしたものだつた。しかし普段なら人の姿などほとんど見られないその離れ周辺が、どうした事がその日は衛兵達の姿がやけに多く、いつもは難無く通り着く筈のその庭も、その日は遠く感じられた。そして誰にも見付からぬ様、姿を隠しながら

漸く辿り着いた気に入りの遊び場が、最早己の物では無くなつた事を知つた。

私は植え込みの下に潜り込み、暫く様子を伺つた。いつもは閉じられている館の扉が開け放たれており、やはり衛兵達がいる。そして館の程近い処に幾人かの侍女達の姿があり、その中心には見た事も無い女がいた。そして細い歌声が流れていた。

女は、籐製の異国風の椅子に身体を預け、異国語の唄を唄つていた。その衛兵達の数の多い事と、かしづく者達の様子から、身分ある姫なのだろうと幼いながらに思つたものだが、今なら分かる。たかが小さな離れを警備するにしては多すぎる衛兵の数、あれは警備というよりも、あの囚われの姫の見張りであったのだと 。

私はその身分あるらしき姫に興味を覚え、茂みの下を獸の仔さながら這い回り、彼女に近付こうとした。彼女の顔を良く見たかったのだ。子供特有的好奇心から、私は慎重にゆっくりと、その姫の顔が見えるところまで移動し、そして子供心に驚いた。彼女は細く、色白で、金色の豊かな髪は緩やかに編まれ肩から胸へと垂れ、膝の上まで落ちていた。そして庭園の花々を見詰める瞳が、涙を流していた。嗚咽を洩らすでも無く、顔を歪めて泣くでも無く、ただ唄を口ずさみながら静かに涙を流す彼女の顔は、儂く、そして美しかつた。彼女の横顔と彼女の口ずさむ淋し気な旋律は、子供であつた私の心を哀しくさせた。

あの時、どれ程の間彼女の顔を見詰めていたのだろう 。

すっかり彼女に気を取られていた私は、突然目の前に落ちて来た毛虫に、思わず声を上げかけた。実際には声など上げなかつたのだが、派手に身動きをした為にもぐり込んでいた茂みも大きく揺れたのだろう、気付かれてしまつた。

「何者だつ！」

鋭い誰何の声が起ると共に、衛兵達があつという間に私が潜んでいた植え込みの辺りを取り囲んだ。私は、多少極りが悪い思いを

しながらも、その場から這い出した。

「殿下」

衛兵達も、侍女達も呆気にとられていた。

「殿下?」

数瞬を置いて起こつた細い声に首を巡らせてみると、件の姫が涙も拭かずにこちらを見詰めていた。私は土で汚れた衣服を払いもせずに、その姫に近付いた。

「どうしてないているの？」

私が唐突に尋ねると、彼女はその時初めて己が泣いていた事に気付いた様な顔をし、涙を素早く拭つた。そして言葉を探す様な素振りをし、やがて口を開いた。

「悲しいから」

彼女はそう答えて微笑んだ。

「どうして？」

子供というのは無邪氣であり、それ故に残酷だ。大人の邪氣ある残酷さとは違つて憎む事の出来ない分、質が悪い。

「独りぼっちだから」

その涙の訳を口に出来なかつたらしい彼女は、私にそう答えた。

「さびしいのか？さびしいなら、あしたもわたしがきてあげるよ自分でも信じ難い事に、彼女の言葉を信じた当時の私は、そんな事を言ったのだ。残忍な皇后の血を引く皇子にも、無邪氣な時代はあつたというわけだ。

彼女は再度微笑み、傍らで戸惑いの表情を浮かべていた侍女や衛兵達を手振りで遠ざけた。

「貴方は、一番下の皇子様ね？」

私は頷いた。

「あなたはだれだ？」

「わたくしはシルキアのルヴィーラ」

彼女はそう名乗った。

シルキア王国

その前の年に、帝国が侵略し滅ぼした王国であった。彼女はそのシルキアの王女であった。帝国が勝利の証として、命を保障すると引替えに連れて来た姫であった。その年、シルキア大公の称号を与えたされた皇太子が、ゆくゆくは娶る事になつていた姫であったが、女癖の悪い父がさつと手を付け己のものとしてしまつた。もっともルウイーラと長兄との間には五つの年の差があった。その頃既に年頃であった彼女に対し、長兄はまだ十一であり、成人までにはまだ間があつたのだ。そんな娘に父が手を付けないわけは無い、しかも美しい姫だ。初めて会つた時、彼女は既に父の子を身籠つていた。身籠つた故に、あの離れを与えたのだった。

「シルキアは、もうなくなつたんでしょう？」

私の残酷な問いに、ルウイーラは、哀しき微笑みを浮かべ頷いた。

「貴方のお国に攻め滅ぼされました。けれどシルキアは無くなつても、わたくしはシルキアの王女なのです、小さな皇子様」

その時、私の胸はちくりと痛んだ。目の前の姫が俄に哀れに思えて來たのだ。

「わたくしは、戦利品なのです。お父上がわたくしの国を滅ぼしました、その証の品なのです……わたくしは……」

ルウイーラは手を伸ばし、私の髪に付いた葉やごみを取りながら、又衣服の汚れを払いながら、静かに語つた。私の実の母である皇后は、間違つてもそんな事はしなかつただろう……。子の髪や衣服に付いた汚れを払つてやるなどといふ事は……。

私とルウイーラの邂逅は、その日の内に父の耳に入つていたであ

る。少なくとも母の耳には届いており、私付きの守役や侍女達はこっぴどく咎められたようであった。そして母は私に、ルウイーラの元へ行く事を禁じた。人一倍惰気の感が強い母は、己が息子が娶る前に己が夫により孕ませたルウイーラを酷く憎んだ。母はさぞルウイーラに毒を盛りたかつた事だろう。だが戦利品である姫を殺すわけにはいかない事を、母は愚かなりにも理解していた様だ。

私は、母に禁じられたにも拘らず、翌日もルウイーラの元を訪れた。彼女はやはり、庭園で泣いていた。

「また、ないていたの？シルキアのおひめさま？」

「あら、本当に、また泣いていたわ . . .」

何でも無い事の様に言って、彼女は儂い微笑みを浮かべた。

「本当に来て下さったのね、エドキス皇子」

「うん、やくそくしたからな」

約束とは守るものだと、その頃の私は本気で信じていたのだ。思い出す度に、笑いがこみ上げて来る。約束など、相手を欺く為にするものだ。私は成長するにつれ、本能的にそれを学んだ。

「ねえエドキス皇子、ここにお出でなさいな」

そう言ってルウイーラは両手を伸ばして私を抱き上げると、膝の上に乗せた。物心付いてから以来このかた、実母は無論の事、乳母や侍女達にでさえそんな事はされた事の無かつた私は、酷く戸惑い、何と言つて良いかも分からなかつた。身体を堅くして緊張する私の頭を、彼女は優しく撫でた。

「ありがとう、エドキス皇子。いらして下さつて嬉しいわ」
ルウイーラは本当に嬉しそうに微笑んだ。

その翌日も、私はルウイーラをおとない、再び母の咎めを受けた。今でこそ分かるものの、幼かつた私には、何故母がルウイーラをおとな事を禁じるのかが理解出来なかつた。

『あの様な遊び女をおとななど言語同断じや』

母が顔を怒りに歪め、吐き出したその言葉の“遊び女”的意味を知るには、当時の私は幼過ぎた。只々母の言葉が理不尽に思え、私は父である皇帝に訴えた。ルヴィーラの元をおとなう許しを、私は父に願い出たのだ。

『ルヴィーラが厭わぬならば良い』

それが父の言葉であった。父はあつさりと許しをくれた。母は抗議したが、皇帝である父に従わないわけにはいかなかつた。それからというもの、私はほぼ毎日、彼女の元を訪れる様になつたのだ。

その頃のルヴィーラは臥せつている事も多かつた。今思えば、悪^{わる}が酷かつたのだろう。ある日彼女は私に、病では無いのだと囁んで含める様に言つた。もしかしたら私は、酷く不安気な顔をしていたのかもしれない。寝台の中にいた彼女は、私を広い寝台の上に引つ張り上げると、さも重大な事を打ち明けるかの様に私に言つたのだ。

「わたくしのお腹の中には、貴方の弟か妹がいるのですよ . . . と。

微笑んでいながらも、彼女の顔が酷く悲しそうに見えたのは氣のせいでは無かつただろう。私は、ルヴィーラの言葉をすんなりと受け止めた。母の異なる兄弟に疑問を抱く事は無かつた。私には母の異なる兄姉達がすでにいた事もあり、そういうものだと思っていたのだ。

「わたしは、おどとがよいな。そつしたら、いつしょにけんのけいこができるし」

「貴方がそう仰るなら、男の子が生まれる様、女神に祈りましょ

う

彼女はあの時、どんな思いであの言葉を言つたのだろう

。恐らく男子など望みはしなかったであろうに。この帝国で後ろ盾の無い母の元に生まれた皇子皇女が、どれ程軽んじられるか、ルウイーラは知っていた筈である。皇女ならまだ良い。そうそう表にして来なくとも許される。政略に使われるその時まで、それこそ城の奥深くに隠つていようと、問題にこそならない。それどころか、箱入りの姫として利点にこそなるだろう。だが男子ではそもそもいいまい。帝家男子が、政に顔を出さないわけにはいかない。いかに軽んじられようとも。

「よく単純にしか物事を考えられなかつた子供の私は、純粹にルウイーラの子の誕生を心待ちにした。彼女の細過ぎる程の身体の腹部のみが日に日に大きくなつて行く様子を、己が弟が元気に育つている証なのだと純粹に喜んでいた。あの頃はまだ、ルウイーラが父を、帝国を、死ぬ程憎んでいた事実を知らなかつたのだ。

「この子が生まれたら、守つてあげてね。お願ひ、エドキス皇子」産み月が近付くに連れて、それがルウイーラの口癖になつた。その度に、私はこう答えた。

「ずっとまもるつて、ちかうよ、ルウイーラひめ」

麗しい兄弟愛など、この帝家にあつては「冗談の様な話だ。ほんの子供であつたとはいえ、自分が嘗てあんな誓いをしたのかと思うと、やはり笑いがこみあげる。

亡国の王女はその後、月満ちて皇子を産み落とした。

1・第四皇子の独白（2）

アルディス・ヨーリティン　　亡国シルキアの王
女が産み落とした子は、そう名付けられた。成長してから知った事
だが、赤子の命名に関して父は全く関与しなかった。それだけでも、
父がシルキア王家の血を引く赤子にどれだけ無関心であつたかが分
かる。国土を帝国に併合されたシルキアの民達の手前、父はシルキ
ア王家の血を帝家に入れたが、ただそれだけの事であつた。

“アルディス”の名は、大聖堂の祭司により付けられたものであ
つたが、“ヨーリティン”の名を付けたのはルウェイーラであつた。
シルキア風の名であつた。シルキアの民達の感情を慮り、父は末の
息子にシルキア風の名を付ける事を許したのである。

「ねえ、ルウェイーラひめ、“ヨーリティン”って、どんなみ?
赤子が名付けられて間も無く、私は尋ねた。

“ヨーリティン”は、シルキア王国建国の祖の名、最初の国王
の名よ」

彼女は赤子をあやしながら、そう教えてくれた。建国の祖の名を、
その王家最後の王子に付けたルウェイーラは何を思つていたのだろう。
何か深い期待があつての事だつたのか、もしくは・・・・彼女特
有の哀しい洒落でもあつたのか・・・・。

ルウェイーラは赤子を“ヨーリ”といつ愛称で呼んだ。自然私も、
ルウェイーラの前では赤子をその名で呼んだ。彼女はよく赤子に唄を
唄つて聴かせていた。私が初めて彼女を垣間見た時に唄つていた、

あの異国語の唄だ。

「シルキア王家に生まれた者は皆、この唄を子守唄替わりに聴かれて育つ。」この唄は遠い昔から王家に伝わって来た唄なの」シルキアの古語で唄われているというその唄を、コーリと共に散々聴いている内に私もすっかり覚えてしまった。意味も知らぬそのシルキアの古語を、もの哀しい旋律に乗せて、幼い頃は私も唄つた。

広き蒼き空の果て 涙無き地 そこに有り
涙無き地の その園の 白き花の開くるを
白き鹿は 良く守りて

白き娘 空に向かいて 花を恋ひ
幸ひの地 求め出でたらむ

白き花々 咲き乱れたる 白き園

その地を守るは 白き鹿

鹿の瞳は常しえに 花を思はむ 花を思はむ

後にルヴィーラはその唄の意味を教えてくれたが、この通り、存外大した意味の唄では無かつた。

幼い頃のアルディスの世界は、実に狭かつた。あの離れの館が、彼の世界の総てであり、母であるルヴィーラと乳母と数少ない侍女かしそき

達と教師、そして私だけが彼の世界の住人であった。

“母上”という言葉の次にアルディイスがたどたどしく覚えたのは、私の名だった。それが“エー”であったり、“エド”であったり、“エドキー”であったり、“エドキチュー”になつたり、毎回違った名を呼ばれたが、小さな両手を伸ばし上機嫌で私の名を呼ぶ幼いアルディイスが、可愛く無い筈は無かつた。あの無愛想な弟を考えると、本当にそんな頃があつたのかと、疑いたくなつて来る。そのアルディイスが“父親”的意味を知つたのは、確かに四つを過ぎてからだつたと記憶している。人間であろうが、動物であろうが、誰にでも父親というものがいるという事実を、彼はその歳まで知らなかつた。無論その歳までには、彼も年に幾度かは父である皇帝に対面している。だが、碌に口をきいた事も無い、声をかけられた事も無い男が父だという実感など、持てる筈など無いのだ。彼よりも多く父と接する機会を持つていた私でさえ、皇帝が我が父だという実感は無かつた。皇帝を世間一般の父親像の枠に当てはめる事は出来ない。むしろ私を後見していたブラコフ・ダウゼント候の方が、どれ程私にとつては父と呼ぶに相応しかつたか . . . 。

アルディイスは“父親”的意味を知つた時、自分の父親は誰なのか、何処にいるのかと母親に尋ねた。その時のルヴィーラの衝撃を受けた表情はよく覚えている。今にも泣きそうな顔をして、部屋を飛び出していつてしまつた。アルディイスは驚き、戸惑い、私に助けを求めた。

「お前は今まで、父上が誰だか知らなかつたのか？」

私の問いに、アルディイスはおずおずと頷いた。恐らく、叱るべき悪い事をしでかしたとでも幼心に思つたのだろう、アルディイスは上目遣いに私を見上げていた。

「お前と私の父上は皇帝陛下だ。もつ何回も会つた事があるだろう？」

私の答えに、幼いアルディイスは少しの間考え、首を傾げた。

「あのえらいひと？おおきいにすにすわってるひと？」

「うん、大きい椅子に座つてる人」

アルディスは、今一つ納得のいかない顔をした。

「ぼく、あのひとじやないとおもう」

「どうして？」

「だつて、ははうえはあのえらいひとのこと、きらいだもん」
何の裏も無い幼いアルディスの言葉に、私は驚き、言葉が続かなかつた。そうだ、国を滅ぼされたルウイーラが皇帝に好意など持てる筈が無いのだという事を、私はその時初めて強く実感したのだ。
そして恐ろしい事に思い当たり、胸が苦しくなつた。私は皇帝の子だ。彼女にとつては敵の、憎い男の息子だ。ルウイーラが私の事も嫌つていたらと考えたら、目の前が暗くなつた。実の母に獻われようとも、他の誰に嫌われようとも私は構わなかつたが、ルウイーラにだけは嫌われたく無かつたのだ。

「エドキス？どうしたの？エドキス？」

アルディスが、愕然としていた私の衣服を心配そうに引っ張つた。

「あ 何でも無い」

私は幼いアルディスの両手を取り、その邪気の無い瞳を真っ向から見詰めた。

「なあ、ユーリ。ルウイーラ姫が皇帝の事をきらいでも、あの人はお前の父上なんだ。一応おぼえておいた方がいい」

アルディスは、素直に頷いた。

アルディスが七つになつた時、帝国は、隣国エスニアへ彼を人質として差し出す事を決めた。その後帝国に責め滅ぼされる事になるエスニア王国は当時、國土こそ帝国には及ばなかつたものの、その

豊富な天然資源の採掘により国は潤つており、軍事力の方も無視出来ぬ程の物を持っていた様だ。そのエスニア王国とクルトニア帝国、両国間で不可侵条約が結ばれ、互いの牽制の為、人質の交換が行われる事になったのだ。

ある日の昼下がり、いつもの様に離れの館に足を運ぶと、ルヴィーラが床に座り込み長椅子に突つ伏して、声を上げて泣いていた。アルディスの乳母がその背を撫でながら、やはり涙を拭きつつ何か話しかけていた。アルディスは困惑顔でその様子に目を向けたままで立ち尽くしていた。人質の件など、その時はまだ知らなかつた私は驚き、ルヴィーラの元に駆け寄ると屈み込んだ。

「何があつたんだ？ルヴィーラ姫？」

髪を振り乱して泣くルヴィーラが、私に気付き顔を上げた。だが言葉も口に出来ない程取り乱しており、私は何も聞かずに、ルヴィーラをぎこちない手付きで抱き寄せた。ルヴィーラは私に縋り付き泣き続けた。そしてやがて泣き疲れて私に縋り付いたまま眠つてしまつた。私はその後、人質の件を乳母の口から聞いた。

「くそつ！ユーリ、一緒に来い」

私はアルディスの腕を掴むと、その場を飛び出した。

「どこへいくの？」

「皇帝の処だ。何もお前が行かなくたつていいはずだ」

私は、アルディスを連れて父の執務室へ出向くと、従者に取り次ぎを命じた。だが腹立たしい事に、父は私に会おうとはしなかつた。戻つて来た取次人は私に伝言を求めるばかりであつた。堂々巡りの押し問答に私は業を煮やし、取次人を押しのけて強引に執務室に踏み込んだ。衛兵達が止めに入つて來たが、さすがに皇太子に次ぐ帝位継承権を持つ私に、強い態度は取れなかつた様だ。

「先程から騒がしいな、一体何の用だ？」

執務中であつた父は、ペンを止め、不機嫌な顔を上げると私とア

ルディスに目を向けた。アルディスを連れていた時点で、父は私の訴えんとしている事を察した様であつた。

「エスニアの人質の件か？」

「はい」

私とアルディスは跪き、頭を垂れた。

「恐れながら、エスニアへはアルディスの変わりに私をお送り下さい。お願ひします」

「エドキス . . .」

アルディスは驚いたらしく、顔を上げて私に目を向けた様であつたが私は顔を上げなかつた。父が苛立たし気に息を吐く気配が伝わつて來た。

「それは出来ぬ、そなたは皇太子に次ぐ帝位繼承権を持つてゐる「では、他の者をお送り下さい」

「何故に？」

「アルディスはまだ七つになつたばかりです。何もこんなに幼い子を送らなくとも良いではありませんか、陛下」

「もう七つであるづ」

私は思わず顔を上げ、実の父を睨みつけていた。

「だがまだ七つだ。皇子皇女達の中で一番役に立たぬのがそれだ。人質に送り出すくらいしか使い道が無い」

「父上」

私は怒りの為に拳を強く握り締めながらも、必死でそれを押さえ、再度深く頭を下げた。

「お願いです。ルヴィーラ姫からアルディスを取り上げる様な事はなさらないで下さい」

「他の妃の子を代わりに送れというか？」

「私をお送り下さい。帝位繼承権は放棄させて頂きます

「身勝手な考えだ」

「壊れてしまします」

「何？」

「ルウイーラ姫が、壊れてしまします」

「下らぬ戯言は聞く耳持たぬ」

「戯れ言ですか ? 父上には戯れ言でも、私にとつてはそうでない。父上は、ルウイーラ姫がどんな生活を送つてゐるかをご存じないからそんな事を仰るんです。父上が捨て置いて顧みない姫にとつて、アルディスは總てなんです。そのアルディスを取り上げたら、ルウイーラ姫は、きっと壊れてしまう」

父は眉間に押さえながら深々と溜息を吐いた。

「なれば壊れぬ様、そなたが慰めてやればよかるう、エドキス。さあ、もう下がれ。余は忙しい、これ以上邪魔立てすると、承知せぬ。誰か、子供等を連れて行け」

・・・・・この時程、父を憎んだ事は無かつたかも知れない。

執務室から追い出された私は、アルディスの手を握つたまま暫く何も言えなかつた。そんな私を、アルディスは心配そうに見上げていた。

「ごめん、ユーリ 、変わってやれなかつた 」

アルディスはにこりと微笑み、首を横に振つた。

「ありがとう、エドキス、でもぼくはだいじょうぶ。ははうえもエドキスがいればだいじょうぶだとおもうよ」

本当に 本当に大丈夫だろうか 私は案じた。本気でルウイーラ姫が壊れてしまうと、案じた。

そして 、その通りになつた

。

1・第四皇子の独白（3）

幼いアルディイスは、エスニアへ人質として送られた。ルヴィーラの嘆きは、私にとつて拷問以外の何ものでもなかつた。出発の日も、彼女は酷く取り乱し、アルディイスの身から彼女を引きはがすのに、侍女達は随分と手間取り、拳げ句の果てには衛兵達が彼女の身を押さえつけなければならない始末であつた。子を取り上げられたルヴィーラは、この世の終末を見たかの様に泣き叫んだ。母親の激しい慟哭に、これから人質としてエスニアへ送られんとしていたアルディイスは、幼いながらも心配そうな顔で幾度も母親を振り返つた後、館を後にした。

「ははうえ・・・・、かわいそう・・・・」

アルディイスは沈んだ表情で私を見上げ咳いたが、泣いてはいなかつた。

「そうだな・・・・」

可哀想・・・・、全くだ。ルヴィーラもアルディイスも、全く持つて“可哀想”だつた。ルヴィーラには、本当にアルディイスが総てだつたのだ。彼女には、アルディイスが唯一の生きる為の理由だつたのだ。例えば、私が人質として他国へ差し出されるとして、実母であるあの皇后が、ルヴィーラの様に我が子の為に身も世も無く嘆き悲しむだろうか？答えは否だ。己が駒を奪われる危険に、皇后は怒り狂うであろうが、決して子の命を案じて泣き叫ぶ様な真似はしまい。又、父の他の側室達にしても、ルヴィーラの様な脆さは無い。恐らくは、子を案じ、悲しみはしたであろうが、ルヴィーラの様に正気を失う事は無かつただろう。ルヴィーラは、弱い女だつたのだ。彼

女の心は、硝子の様に、いやそれ以上に、あまりにも脆く儂かつたのだ。私の父は、興味本位にうら若かつたルウイーラに手を出し、孕ませた挙げ句、全く顧みなかつた。本当ならば長兄の妃に・・・、皇太子妃となる筈であつたルウイーラを、あの様な低い地位に貶めた。

私は、手を伸ばしアルディスの頭を撫でた。本当ならば、皇太孫となるべき皇子であつたかもしれない。

「必ず戻つて来いよ、ヨーリ」

「うん」

頷く幼い弟を、私は背を屈めて抱き締めた。アルディスを抱き締めたのは、この時が最後であつたと思つ。

館へ取つて返した私の姿を認めるや、ルウイーラは侍女達の手を振り切り泣きながら私に縋り付いた。

「何故ヨーリなの！？何故あの子なの！？何故他の皇子か皇女じゃないの！？何故つ！？」

ルウイーラは私のチユニツクを破れんばかりに掴み、喚き散らし、そのまま床に頽れた。私は己のチユニツクを掴むルウイーラの両手をそれぞれ握り、悲痛な泣き声を上げるルウイーラの震える肩を見詰めたまま立ち尽くしていた。

そして、やがて泣き喚く事に疲れた彼女は、表情の無い顔でぼんやりと私を見上げ、呟いた。

「何故・・・、貴方じやないの・・・？」
胸を抉られる様な呟きだつた。

思えば、彼女の狂氣はその日から始まつていたのだろう。ルウイーラは、少しづつ常軌を逸していった。本当に少しづつ・・・。

毎日泣き暮らしていた彼女は、やがて泣かなくなつた。少しづつだが笑顔を取り戻したルヴィーラに、侍女達は胸を撫で下ろし、私もほつとしていた。だが彼女が泣かなくなつたのは、悲しみが薄れたらでは無く、エスニアに送られたアルデイスの存在が彼女の心から拭い去られたからであつた。彼女の心からは、いつの間にか人質に送られたアルデイスはいなくなり、そして私の存在も消えていた。彼女の中では、アルデイスは常に彼女の傍におり、彼女は私の名を忘れた代わりに、私をユーリと呼んだ。

幾度説明したか分からぬ。私はユーリでは無いのだと……。
。だが、最早彼女の耳にはそんな私の言葉も届かなくなつていた。
そして彼女は、一日でも私が姿を見せないと酷く取り乱す様になつた。私の姿が見えないのは、父のせいだという思考に繋がつたのだろう、父への呪詛の言葉を吐き散らす様になつた。父に対して吐かれた憎しみの言葉が、父に対する物だけでは無くなるまでに然程の時間はかからなかつた。ルヴィーラは父を憎み、帝家を憎み、挙げ句は帝国を憎んだ。否、こうして気が触れるまで、私の前では口にする事が無かつたとはいえ、彼女はずつと憎んで来たのだろう。國を奪われた彼女が、父を、帝家を、帝国を、憎まずにいらされた筈など無かつたであろうから……。

「あの男を、呪つてやる！呪つてやる！クルトニアを呪つてやる
つ！死んでしまえつ！死んでしまえつ！」

ルヴィーラが長い髪を振り乱して、喚き散らしていた。侍女達は、もういい加減宥める気力も失なつたのだろう、只、傍観するだけであつた。

「帝家の間など、皆呪われるが良いつ！あの男の血筋など、死に絶えてしまえつ！」

己が息子も、その男の血筋だという事実は、彼女の中では最早事

実では無くなつたのであらうか

「ゴーリ . . . 、ああ、ゴーリ」

ルウイーラが私の姿を見付け駆け寄つて来るや、私を抱き締めた。すでに彼女と同じ程に背丈の伸びていた私を、アルディスと信じて疑わなかつた彼女の狂氣は、己が息子の年齢さえも忘れ去らせたのだ。

「ゴーリ、わたくしのゴーリ、あの男に連れ去られていたのね、可哀想に、酷い事をされなかつたか？」

そう言つて、彼女は私の無事を確かめるかの様に、私の全身を狂氣の宿つた瞳で幾度も見回し、私の髪を搔き揚げる様にして幾度も幾度も私の頭を撫でた。

「何もされていないよ、大丈夫。昨日は皇后の生誕の式典があつたんだ。」

「皇后 . . . ?」

「私を産んだ母だよ」

「何を言つているの？」の子は . . . 。そなたを産んだのは、このわたくしではないの。それはそれは苦しい思いをして、わたくしはそなたを産んだのですよ」

「ルウイーラ姫 . . . 」

「皇后などの . . 、帝家のの人間などの式典に出ていたのですか？そなた？ . . . ああ、あの男に強制されたのね？」

確かに強制はされた。母の生誕式典など、出なくてすむなら出たくなど無い。己自身の生誕式典も含め、ああいつた類いの式典が、私は大嫌いだつた。

ルウイーラが再び私を抱き締めた。ルウイーラのしたい様にさせてやつた。

「可哀想に、可哀想に 」

「声が、涸れているね、姫」

「可哀想に 」

「もう、喋らない方がいい、ルウイーラ姫」

私が訪れなかつた間、ずっと喚き散らしていたのだろう . . .
. 私は、ルヴィーラ姫の華奢な肩に顔を埋め、その背に手を回
した。こんな母親を見たら、アルディスは何と言うだろう . . .
. . 壊れてしまつた母親を見たら アルディス
は 。
私は、父を恨んだ。

1・第四皇子の独白（4）

凡そ一年半余りの後に、アルディイスは帝国に帰還した。一步間違えばエスニアで処刑されてもおかしくは無い状況下に置かれた彼が、無事に帰還した事は奇跡に近かつたかもしない。帝国が両国の不可侵条約を犯し、エスニアへ攻め入ったのである。父と兄は、初めからそのつもりであつたのだろう。初めからエスニアを落とすつもりで、相手国を欺く為にアルディイスを人質として送つたのだろう。

帝国軍は、侵略の火蓋を切つて落とすと同時にアルディイスを奪い返した。よくぞ奪い返せたものだ。この時ばかりは、軍を率いた長兄とその参謀に感謝したものだった。

私も前線では無かつたが、この侵略戦争に参加した。ルウイーラの元を離れるのは不本意であつたが、父である皇帝の命に逆らう事など出来よう筈も無い。私は戦場でアルディイスと再会し、エスニア陥落後、帝国へ連れ帰つた。

ルウイーラ姫が発狂した事を、私はアルディイスに話した。だが、それがどういう事なのか未だ九つの彼には、はつきりとは分からなかつただろう。

私は、事実を知らせるだけ知らせるど、アルディイスをルウイーラの元へと連れて行つた。

庭園で籐製の椅子に座り、あの唄を唄つていたルウイーラは、手元に何かを抱えていた。まるで赤子を抱える様に大事そうに何かを抱え、覗き込み、あの異国語の唄を唄つっていた。

「あの丸めた掛布を、ユーリ様と思い込んでおられるのです」

アルディスの乳母が悲痛な面持ちで告げた。

私が出陣した後、残されたルヴィーラは数日の間子を求めて泣き叫び、そしてアルディスの使っていた子供用の掛布を見つけ出すと、それを抱え込み大人しくなつたのだという。

掛布を我が子と信じてあやしているルヴィーラの表情は穏やかで、とても気が触れている様には見えなかつた。

静かに歩み寄る私達に気付いたルヴィーラは、微かに首を傾げた。

「母上、ただいまかえりました」

アルディスの挨拶の口上に、ルヴィーラは更に首を傾げ、不思議そうな表情でアルディスを見、そして私を見た。

「だあれ？」

やはり・・・、ルヴィーラには私の顔どころか、己が息子の顔さえも分からなくなつていた。アルディスが傷ついた表情を浮かべた。

「ユーリだよ、ルヴィーラ姫」

私は困惑を押し隠し、無理に微笑みながら彼女に伝えた。

「ユーリ・・・？」

「無事に帰還した」

「ユーリ・・・、何故・・・？ユーリが一人いるの？」

ルヴィーラはアルディスと私の顔を交互に見比べながら、困った様な表情を浮かべた。

「私は、エドキス、ユーリの兄だ。ユーリはこっちだ」

そう言つて戸惑うアルディスの背を押してやると、彼はゆっくりと母親に歩み寄り、彼女の首に両手を伸ばしてその肩に顔を埋めた。ルヴィーラは抱えていた掛布を放り投げると、幸せそうな表情を浮かべて素直にアルディスを抱き締めた。

「ユーリ、わたくしのユーリ」

アルディスは涙を零していた。

「ゴーリー？泣いているの？ゴーリー？」

ルウイーラが、俄に顔色を変えた。

「あの男に、あの男に酷い事をされたのね？何をされたのです？」

「ゴーリー」

ルウイーラはアルディスの両腕を掴むと、鬼気迫る表情で問い合わせした。

「あの男、許さない、呪つてやる、わたくしのゴーリーに、わたくしのゴーリーに！」

母親の、狂氣の宿つた瞳を目の前にし、アルディスは何を思っただろう・・・。

私はルウイーラを宥め、だましだまし、母親の剣幕に硬直していったアルディスから引きはがした。衝撃が大き過ぎたのか、アルディスの涙も止まっていた。

もうその頃には、ルウイーラの寝室の扉の外には錠前が取り付けられていた。彼女は以前に一度、寝ずの番の日を盗み真夜中にふらりと庭園に出てしまい、ちょっととした騒ぎを起こした事があったのだ。それからルウイーラの就寝後は、扉錠を下ろす様になった。

アルディスの教育係は、正気を失つたルウイーラのもとに暮らすのは、アルディスにとつて精神上良く無いといつ旨を父に進言していた。父は、本城にアルディスの居室を与えたが、アルディスは移らなかつた。

ルウイーラの狂氣は、アルディスから笑顔を奪い、無邪気さを奪い、表情までをも奪つた。あの呪詛の言葉を、彼は幾度母親の口から聞かされたのだろう。ルウイーラは、帝家のの人間であるアルディスの前で一体幾度、帝家のの人間を呪つたのだろう。帝家の血を引く彼の前で、幾度その血を蔑み呪つたのだろう・・・。アルディスはその後、決して泣く事はしなかつた。少しでも自分が涙を見せるごと、母の狂氣が顯著になると言う事を理解していたのだろう。

その後、彼女は病を得、アルデイスの十歳の生誕日を待たずして亡き人となつた。臨終の折、彼女は正気を取り戻し私の名を思い出した。私を見て、私の名を細い声で呼んだ。

「この子を、お願い、貴方にしか頼めないのです . . . 、エドキス皇子 . . . 」

やつれ果ててはいたが、ルウイーラは未だ儂く美しかつた。私は、生涯アルデイスを守ると、この時、もう一度ルウイーラに誓つてやつた。今度はきちんと剣に誓つてやつたのだ。ルウイーラは、ほつとした様に微笑み、添く . . . と咳き、息を引き取つた。アルデイスは、泣かなかつた。只、母親の手を握り、息をしなくなつた少女のような顔を、硝子玉の様な瞳で見詰めていただけだつた。

ルウイーラの葬儀はひつそりとささやかに行われた。後ろ盾も持たぬ側室であつた為、一年の服喪を強制される事も無かつた。その為、彼女の為に一年の間喪に服したのは、アルデイスと私だけであつただろう。生前の彼女に仕えた者達でさえ、一年の服喪を行つた物は無かつたであろう。生前、帝国を呪詛する言葉を散々喚き散らした彼女の為に、そこまでしてやる者がいたとは考え辛かつた。

ルウイーラが身罷つた後、私はアルデイスを本城の私の私室に連れて來た。どちらにしろルウイーラが身罷つた以上は、アルデイスもあの離れの館を出なければならなかつた。彼が以前本城内に与えられた部屋は、私の部屋からは距離があり、又、私の部屋部屋に比べると、程遠い造りと広さであった。それ故、私は自室の内的一部屋にアルデイスを住まわせる事にしたのだ。案の定、又、母が反対した。

「売女の息子を住まわせるのか？」

私は、母が激怒しながら言つた言葉の意味が理解出来る程に成長していた。

「ルウイーラ姫が売女なら、貴女は一体何なんですか？皇后陛下

私は、ルウイーラを侮辱する母を憎んだ。彼女を母と呼ばなくなつて、どれ程になつてはいたであろう。私は父を嫌い、母を憎み、同母の兄には何の情も持つてはいなかつた。他の異腹の兄姉達に対しても同様であつた。私にとつては皆、血の繋がらぬ他人以上に他人であつた。唯一、アルディス以外は . . . 。

母は、私の言葉に身体を震わせた。

「彼女が売女なら、貴女だつて売女だ」

その瞬間、私は頬を張られていた。笑いが込み上げた。この女にこんな言葉を面と向かつて言つたのは、後にも先にも恐らく私だけだろう。

「お怒りですか？なら私に毒を盛ればいい、末姫の母親に毒を盛つた様に」

「何と言つ事を、何と言つ事をつ、そなた、この母を愚弄するか四つになる末姫の母親は帝国貴族の娘であり、父の寵愛を一身に受けた姫であつたが、二人めの子を身籠つた時に原因不明の死を遂げた。末姫がまだ二歳にも満たない頃であつた。死因は公にはされなかつたが、毒害であつた事を私は知つてゐる。惜氣の為に、母が毒害させたのであらう。今まで母が毒害させた人数は、恐らく両の手指では足りない程だろう。

龍姫を殺された父は、誰の差し金かを知つてゐた筈である。だが、証拠を掴めなかつたのだろう。仮令証拠を掴んでいたとしても、皇后に立てられた母を処罰するのは難しかつたであろう。彼女には強力な後ろ盾が付いていた。それ故に皇后に立てられたわけである。

私がアルディスを引き取る事に關して、父は別段異を唱えはしなかつた。私には、ブラコフ・ダウゼント候が後見として付いていたが、アルディスはまだ後見人を持つていなかつた。その旨を父に進言すると、父はブラコフに、私共々アルディスの後見をも務める様命じた。

惜氣の感の強い母にとつてはさぞかし面白く無かつた事であろう。父が他の女との間に成した子を、己の実の子が手元に引き取るなどという事は 。

案の定、間もなくしてアルディスの食事に毒が盛られた。普段は二人で食事を摂っていたのだが、たまたま私が留守をしたある日のことだつた。私達にも、それなりに毒味役は付いていたが、その他に私は毒味用として小型犬を何匹か飼つていた。侍女がそれらの犬達にアルディスの食事を毒味させようとしたら、どの犬も匂いを嗅いだきり、口にしようとはしなかつた。毒に関して良く仕付けられた犬達であり、余程の毒でない限りは、敏感に嗅ぎ分ける。

私の留守を狙つて毒が盛られたのだ。誰の差し金かなど、私にとっては考えるまでもなかつた。命を奪つたとて、政治的に何の得にもならない、外腹の五番めの皇子に毒を盛るなど 。

その時から随分と長い事、一家での晩餐の際、又、公の席での際にアルディスが口に入れる物は、私が總て毒味をして見せた。そう、母に見せつける為であつた。一人の男子しか持たない母に取つて、私を死なせるわけにはいかなかつたであろう。さもなくば、兄である皇太子に何か事があつた場合、皇帝位はやがて他の女の産んだ皇子に取られ、母の権力も失墜するであろうから . . . 。

「アルディスを害して、得をする者がいるとは思えぬが 」

「確か、兄達の誰かが言つた。

「得はしなくとも、喜ぶ人間がいるようです」

私は答えた。

「本当に毒が入つていたら 、エドキスが死ぬぞ 」

その時傍らのアルディスがぽつりと呟いた。

「構うものか」

その時、私は本当にそう思つた。十五にしてすでに私は生に対しそれ程強い執着を持つてはいなかつたのだ。それ以上に私は、アルディスを失う事を怖れた。何故だろう ルヴィーラに誓つたからか 私はあの誓いに縛られていたのであろうか . . . 。

・・・・・今でも縛られているのであらうか・・・・・ならば、兄姉同様、彼の事を捨て置いていたであろうか・・・・・否、誓いなど、只の口実に過ぎないのだろう・・・・・ルヴィーラの忘れ形見を捨て置く事など、どうして出来よう・・・・・私は、ルヴィーラを愛していたのだ。それが、母に対する様な愛情だったのか、女に対する愛情であったのかは分からぬ。只、私は彼女の面影に捕われた。彼女の死後、時が経つにつれ彼女の面影は鮮烈になつて行くばかりであつた。様々な女達に手を出しても、実際に彼女達自身を見ていた事など無かつた。その証拠に、これまで係わつた女達の顔を上手く脳裏に描く事が出来ない。私がそこに重ね見ていたのは、いつでもルヴィーラであったのだ。そう・・・・・、いつ

1
・
第四皇子の独白
終

クルトニア 、この大陸の中原を占める帝国の名であり、永きに渡る歴史を所有する国、そして永らく軍事国家として、その名が知れ渡つて来た国であった。

現皇帝スルターク五世は、歴代皇帝に劣らぬ程の好戦的人物であった。そして当然の如くその気質は大陸中に知れ渡つており、その子供達の悪評もまた、大陸中に轟いていた。

好事家でもあつた皇帝スルタークは、正妻の目を盗み、多くの女達に手を付け子を成したと言われているが、正式に認められていた子等の中で生存していたのは、当時八名のみであった。その内男子は五名、正室腹の者が皇太子を含む二名の、側室腹の者が三名であった。

側室腹である五番目の皇子は、その年十七になつた。

母は、その昔帝国に攻め滅ぼされたシルキア王国の王女であつた。まだ十六の時に、手籠め同然に皇帝の子を孕ませれ、十七でこの皇子を産み落とした。そして発狂し、皇子が十の生誕日を迎える前に儻くなつた。

皇子の名は、アルディス・ヨーリディン、滅多に笑顔を見せぬ影のある皇子であつた。剣の腕は中々のものであり、それに関しても周りから一目置かれる存在ではあつたものの、全く持つて無愛想なその氣質から、大層な変わり者扱いをされていた。

帝城内に儲けられた軍兵達の練武場には、今日も剣の打ち合の音が高々と響いている。気付けば人だかりが出来ているが、別段珍しい光景というわけでは無かつた。その兵達の輪の中心にいたのは、団栗色の髪の、まだその顔立ちにあどけなさをそこはかと残す青年であつた。練武用の、先の潰された剣を華麗な身熟みこなしで振るう。対戦していた相手があつという間に剣をはね飛ばされると、すかさず輪の中から別の者が名乗りを上げ、青年に躍りかかつて来た。その度に取り巻く輪からは、やんやの声が激しく上がる。そんな男達のむさ苦しい喧噪へと、静かに近付いて来る者があつた。

その人物に逸速く気付いた兵達は、姿勢を正すや彼の為に道を空ける。自然と出来上がつた道を、あたかも当然の如き表情で通り抜けると、彼はその青年の剣技を腕を組みながらしばし眺めた。顔立ちを見てみれば、輪の中心で剣を振るう青年に似ていなくも無い。青年の団栗色の髪よりもほんの心持ち濃い色の髪は、青年同様短く刈られており、並んで立てば恐らくは、その細身の体型も良く似ていた事が分かつたであろう。だがその瞳だけは大きく異なつていた。その彼の、色素の薄い瞳の色 剣を振るう青年の瞳に比べると暖かみの全く無い寒々しい、ごく薄い茶とも黄とも言える色をしていた。

青年の相手をしていた兵が打ち負かされた時、端で見物していた彼は、突然地を蹴り腰の剣を引き抜いて、後ろから剣を振りかぶり青年に襲いかかつた。周りの輪から鋭いじよめきの声が起こつた。見物人の誰もが、手に汗を握つた。しかし 間一髪で半身を翻した青年の剣が、襲撃者の剣を受け止めていた。襲撃者が、ふつと鼻で笑つた。

「良く受けた。アルディス」

「汚いぞ、エドキスつ。しかも真剣で」

「敵が、そんな事を頼着すると思うのか？坊や」

皮肉な笑みを浮かべながら、エドキスはアルディイスの剣を弾くや問答無用で襲いかかる。打ち合つ事数合、周りが息を飲んで兄弟の剣技を見守った。

数刻の後、剣を空高く弾き飛ばされたのは、歳若い青年の方であった。

「お前の負けだ。罰として今晚は私に付き合え、いいな」

それだけ言い捨てる、エドキスは悔し氣な表情を隠しもしない弟にさっさと背を向けた。

エドキス・アルゼイス、帝国の第四皇子であつた。正室腹の皇子であり、皇太子に次ぐ帝位継承権を持つ皇子であつた。八人の帝家の子息子女達の中では、一番の切れ者だと影では噂されていたが、大変な皮肉屋として知られていた。そして又八人の皇子皇女達の中では、一番酷薄な人物としても悪評高かつた。彼の同腹の兄である皇太子は、幸いな事に情の深い面も持ち合わせていたが、この皇子にそんな面を認める者は、殆どいなかつたと言つて差し支え無かつたであろう。実際の処、実の両親に対しても、彼は情などという物は持つていなかつたのである。

「殿下、デザウ候主催の舞踏会にお出ましになられるのですか？」

「ああ、かまわないだろう？アルディイスも連れて行く」

「構いませぬが、アルディイス様が首を縊に振りますでしょうか？」

」

「今宵は嫌とは言わせないさ」

口元を歪め笑みを浮かべるエドキスに、彼の第一の側近であるブラコフ・ダウゼント候は密かに溜息を吐く。

「又、アルディス様の御機嫌を損ねる様な意地悪をなさつたのですか？殿下」

その言葉に、エドキスは声をたて短く笑つた。

「可愛いから、つい苛めたくなるのは確かだが……、今回は違うぞ」

「如何でしょうね……」

すでに髪には白い物もかなり混じる年齢のブラコフ候は、大柄であるせいかどうか、年よりも若々しい。一人の皇子達を、幼い頃より見守り補佐して来た人物であった。この世の中で、二人の皇子達の人となりを一番良く理解していたのは他でもない、このブラコフ候であつただろう。

「それでは、デザウ候の方へは急いで使いを出して、その旨伝えておきましよう」

「ああ、アルディス共々、楽しみにしているとでも伝えておけ」

そう言つて、エドキスは楽しそうに笑つた。

ブラコフ候の予想通り、着飾つた第五皇子は不機嫌を隠そつともせずに馬車に乗り込んだ。

「汚いぞ、エドキス……」

「何が汚いだ、お前が負けたのが悪い、恨むなら口の剣の未熟さを恨め」

皇族らしく、華やかな衣装に身を包んだ一人の皇子達は、馬車の端と端に座を占め、一人して長い足を投げ出していた。片や口角を上げながら、片や不機嫌な表情で窓の垂れ幕の隙間から外を眺めながら。

「お前も、十七にもなつて、いつまでも社交的な場を避けるのはよせ、アルディス。人付き合いが下手なのは分かる。華やかな場が

嫌いなのも分かる。好きになれとは言わないが、少しは慣れる。ついでに女の扱い方もな

「何の為にだよ」

「そんな事、人に聞かなきゃ分からぬのか？だからお前は“坊や”だつていうんだ」

エドキスは、呆れ顔でこれ見よがしな溜息を吐いた。

「理由は幾つかある。ああいつた処に顔を出しておくと、時たま思わぬ貴重な情報が手に入る事がある。又、各貴族達の動向を探るのも良いし、ひょんな事で弱みを掴めば、それが又、役立つ事もある。あとは まあ女だな、嫌でも色々寄つて来る。皆、言い含められてる女ばかりだから、こつちが望めば簡単に足を開く。大貴族の娘から、あわよくば帝家の側室にでも入れればって程度の家柄の娘まで、様々だ」

エドキスは、忌々し氣に息を吐く。

「だが、そういうた女達も時として役立つ。まあ、お前に寄つて来るのは、恐らく純粋にお前に興味を持つていてる女だろうから、安心しろ。気に入ったのがいたら抱いてやれ、きっと喜ぶだろうよ。子の一人や二人、孕ませたつてお前なら政治的にも問題無い」

「俺は、お前のそういう処が嫌いだ」

ぽつりと呟くアルディイスに、エドキスは心底可笑しそうに笑い出した。

「“そういう処”だけじゃないだろ？お前が嫌いなのは、アルディイス坊や」

「手当たり次第、女に手を付けて回る処も嫌いだ」

「馬鹿を言え、きちんと選んで手を付けてる」

「手を付けては、すぐに捨てる。大抵一度で捨てるだろ？」

「当たり前だ、それなりの価値のある女ならまだしも、貴族等の思惑がらみの女なんぞ、後々厄介なだけだろ？」

皮肉気な笑みを浮かべるエドキスに、アルディイスは口を噤む。

「まあ、深く考えるな。要は、お前は女の扱い方をさつさと覚え

ろつて事だ。帝家の男子が公の場で、女の相手も満足にこなせない様じや問題だぞ」

苛立たしく思いながらも、アルディスとエドキスの言い分が正しい事くらい分かっていた。

一人の皇子達が、ブラコフ候を伴い現れると、広間の誰もが深々と頭を垂れ最高の礼を皇子達に対し取った。長身で細身で、その上中々の美男子であつた皇子達は、評判はどうであれ、若い娘達にはそれなりの人気はあつた。エドキスは、ことあるごとにアルディスに愛想良くしろだと、笑えだと耳打ちして来た。それが鬱陶しくて、アルディスは隙をみて、さっさとエドキスから逃れると、杯を片手に人気のないバルコニーへと出た。冷えた空気が、酒で火照った頬には気持ちが良かつた。

アルディスには、全く持つて楽しい時では無かつた。貴族等と上辺だけの会話を交わす事も、上流の女達の手を取り機嫌を伺つてやる事も、白々しく、又馬鹿馬鹿しいとしか感じられなかつた。ましてや舞踏などとんでも無い。エドキスの言う事は分かるのだが、やはり自分には苦痛以外の何ものでもないのだ。

石造りの手摺に両肘を付いて、前屈みに寄りかかりながら独り静かに杯を傾けていると、後ろから密やかな衣擦れの音が近付いて來た。アルディスは密やかに溜息を吐く。もう邪魔者がやつて来てしまつたのかと・・・。頼むから自分の事は放つておいて欲しい。そんな内心の言葉など、口に出さぬ限り相手に伝わる筈など無い。

「春とはいえ、夜は冷えます、殿下。あまり長くおられると、お風邪を召されますわ

涼やかな若い娘の声であった。

「…………いらぬ世話だ。お前方こそ、中へ引っ込んだ方がいいんじゃないのか？風邪を引くぞ」

アルディスは、振り返りもせずに答えた。

「こちらを向いても下さらないのですか？アルディス殿下。女性をそのように邪険になさるのもどうかと思いますわ、帝国騎士道に反するではありませんか？」

きっぱりとした物言いは、しかし機嫌を損ねている様には聞こえなかつた。

アルディスは、軽く息を吐くと、振り返つて声の主を見た。

「別に邪険にしたわけでは無いんだが……、ただ興味が無かつただけだ」

無愛想なアルディスのその礼を失つした言葉に、だがしかし娘はにこりと微笑んだ。

「では、これから興味を持つて下さいませ、殿下」

アルディスは訝しきな目を、その娘に向けた。年の頃は恐らくアルディスとそうは変わるまい。春らしく柔らかな色彩の衣装に身を包み、褐色の柔らかそうな髪を若々しく結い上げている。どこの娘かは分からなかつたが、その豪奢な装いから、かなりの家柄の娘だという事だけは、いかなるアルディスとて想像に難くなかった。

「何の用だ？」

アルディスは、娘の言葉を無視して尋ねた。

「用が無くては、お声をかけてはいけませんでしたか？」

「…………別に、いけなくは無いが」

その返答に、娘は実に嬉しそうな表情を見せた。

「わたくし、殿下とお話をしたいのです」

「何の話がしたいんだ？俺と話したところで、楽しい事なんか無いと思うぜ」

「それは如何でしょう。楽しい事があるやもしれませんわ」

娘は朗らかに言いながら、大胆にもアルディスの腕に自分の腕を絡めて來た。

「俺を誘つてるのか？」

アルディスのぞんざいな物言いにも、娘は動じるどころか挑発的な眼差しを返して來た。

「そうですわ、貴方様を誘つてますの」

つんと顎を聳やかせる娘に、アルディスは苦笑した。

「帝国貴族の娘の貞操觀念てのは、一体どうなつてるんだ？別に親に言い含められてるわけでもあるまい？俺に取り入つたって、何の得にもならないだろうに」

「わたくしは、ただ純粹に殿下に一夜のお情けを頂きたいだけですわ。親など関係ございません」

今まで、これ程あからさまに誘惑して來た女は他にいなかつた。勝ち気な瞳を真つすぐに向けて来る様は、そんな言葉を口にのぼせながらも、一種清らかにさえ見えた。だからなのだろう、アルディスは、無言で娘の手首を掴むとバルコニーを後にしていった。

娘の手首を荒々しく引きながら、アルディスは空き部屋を見付けると、素早くその娘を引きずり込んで鍵をかけた。そして天蓋付きの寝台に娘を押し倒し、そのままその上に伸し掛かった。誰の為なのか、一時の情事を楽しむ客人達の為なのか、室内には幾つかの灯りが灯っていた。その灯りに照らされた娘の顔に一抹の恐れの色が刷かれる。アルディスは無言のまま彼女の美しく結われていた髪を掴むと、いきなりその唇を塞いだ。幾度か軽く重ねると、抵抗も何も無く娘の唇はすぐに緩んだ。その隙間を割り彼女の舌を捕らえ、貪る様に深くその口内を味わっていると、やがて娘の喉からは苦しきな声が洩れた。アルディスは目を開いたまま、娘の苦し気に瞑られた瞼を見ていた。激しくなる口付けに長い睫毛は揺れ、その喉からは益々苦しきな細い声が洩れ出す。彼女の息があがるまで、アルディスはその唇を解放してやろうとはしなかった。

それまでも愛してなどいない女を既に幾人も抱いた経験はあつた。女に惚れた事など、まだ一度も無かつた。女を愛しいと思つた事も、女に何かしらの夢を抱いた事も無い。だからといって女を憎んだ事も無ければ、エドキスの様に女を物として見た事も、その様に接した事も無かつた。だがこの時ばかりは、何故かこの娘を甚振いたぶつてやりたい気分にさせられたのだ。あの様にあからさまに誘いをかけて来た娘を、一瞬でも清らかだと感じてしまつた己の気持ちへの嫌悪感からであったのか、アルディス自身分からなかつた。

アルディスは娘から身を起こすと、冷めた瞳で乱れた息の娘を見下ろした。

「それ以上の事がしたいなら、自分で脱げ」

上気した頬に瞳を潤ませた娘は、のろりと起き上ると、衣装を脱ぎ始めた。燭台に照らし出される彼女のその様を眺めながらアルディスは、何て沢山の布を身に着けているのだろうと、ぼんやりと思った。娘は恐らく、一人で衣装を脱いだ事など無かつたのである。随分と苦労している様であつたが、時間をかけながらも全裸となり、結い上げていた髪の飾りの最後の一つまでをも寝台の下に落とした。そして今度は、我が身を隠しもせずに両手を伸ばすと、アルディスの上着の首もとから飾り鉗を、ひとつひとつゆっくりと外し始めた。

アルディスは娘の望む様にさせながら、片手で彼女の頬に触れ、今しがた彼女の息が上がるまで嬲つてやつた唇に触れた。彼女に上着を脱がされ、その下のシャツを脱がされたところで、娘の細い首筋に顔を埋めた。滑らかな首筋は、酷く甘い香りがした。春の花々に群がる蜂というのは、こんな気分なのかもしれないと頭の何処かで思った。そして唇を這わせ、時折きつく吸つてやつた。

娘は両腕をアルディスの背に回し、されるがままに時折震える息を零した。アルディスの手が胸の膨らみを包み込み、唇がその頂を含んだ時、彼女の口からは細い声が洩れた。そして彼の手が閉じられていて足を割り、その間の奥底に滑り込んだ時、娘は身体を堅くした。手の甲で口を押さえながら、アルディスから苦し気な顔を逸らした。誘いをかけて来た時の強い瞳とは裏腹な姿であった。そう、まるで生娘のような 。アルディス自身とそう年が変わるとも思えぬ、うら若い娘である。然程の経験があるとは彼も思つてはいなかつたが、自ら服を脱ぐ様な女である、よもや生娘だなどと予想だにしなかつた。

潤つた彼女の中にアルディスが一気に押し入った時、娘の口からは鋭い叫びが上がつた。アルディスにしがみつく娘の両腕もその身

も震え、背けた顔は苦痛に歪み、瞳からは涙が零れていた。その叫びと震え・・・、それが喜びの為では無かつた事くらい、若いアルディスにて分からぬ筈が無かつた。

「初めて・・・だったのか？」

アルディスが我に返り尋ねると、娘は小さく頷いた。彼女は身体を重ねたまま動かぬアルディスを見上げ、痛々しく微笑んだ。

「わたくし、近々輿入れ致しますの」

「・・・・」

「だから・・・・」

アルディスには、さっぱり理解が出来なかつた。輿入れするから、だから何だと言つのだ・・・・。

「だから、意に染まぬ方の物にされる前に、殿下のお情けを頂きたかつたのです・・・・」

消え入る様な囁きであつた。

「・・・・ずつと、ずつと、お慕いしておりました。わたくしは、今、とても幸せです、殿下」

衝撃であつた。

「この夜の思い出を胸に、わたくしは恐らく強く生きて行けると思ひます」

涙を零しながら見上げて来る娘を、その時初めて美しいと感じた。アルディスは、彼女の頬に口付けを落とし涙を吸い取つた。そしてその唇を塞ぎ、先程とは打つて変わつた優しい仕草で、幾度も彼女の唇を味わつた。その褐色の髪を幾度も撫でてやりながら、背を幾度も優しく撫でてやりながら、幾度も口付けの雨を降らせてやりながら、娘を抱いてやつた。

彼女は泣きながら、もう一度幸せだと呟いた。

名前さえも聞かなかつた。その娘がどこへ嫁ぐのかも知らない。調べれば以外と簡単に分かるのであろうが、アルディスはこれっぽ

ちも知りたいとは思わなかつた。

恋する者がありながら、意に染まぬ者との婚儀を強いられる、皇族や貴族なら当たり前の事だ。それならば初めから、恋などしなければいい。あの娘は何故この自分になど恋したのであるうかと、アルディスは娘を哀れんだ。そして、輿入れの前に自分に抱かれたあの娘は、本当に幸せだったのだろうか……と、アルディスはその後も考えた。

帰りの馬車の中で、ぼんやりと窓の外を眺め、あの娘の事を考えていたら、いきなり顎を掴まれ強引に唇を奪われた。途端に思考は現実に戻り、相手を乱暴に押しのけ、唇を拭つた。

「そういう事はするなつて言つてるだらうつ！ 気色悪いっ！」

「さつきから呼んでるのに、上の空だつたお前が悪い」

本気で怒る弟に、そう言つて悪びれもせずににやりと意地悪く笑うエドキス。

「お前は両刀遣いかよつ！？」

「両刀遣いの何が悪い？ お前ならいつでも喜んで抱いてやるぞ」「流し目を向けながら、とんでもない事を言つ兄に、アルディスは殴り掛かつた。その拳を難無く受け止めて、エドキスは爆笑し出した。

た。

「馬車の中で暴れるな、全ぐ。冗談に決まつてるだらう」

「お前のはいつも冗談に聞こえないんだつ！ くそつ、お前のせいで鳥肌が立つた」

本気で嫌そうな顔をしているアルディスの様子に、エドキスは笑い続ける。

「何時まで笑つてるんだよ」

「お前、想像しただろ？」

アルディスはかつとし、再び拳を繰り出すも、やはりエドキスに

難無く掴まれた。

「暴れるなつて、からかい甲斐のある奴だな。安心しろ、私は男よりも女の方が断然好きだから」
まだくつくつと笑い続けているエドキスの横で、アルディスはふてくされた様にそっぽを向いた。

「お前、ザヴィアス候の娘に手を出したのか?」「漸く笑いを納めたエドキスが唐突に聞いて来た。

「ザヴィアス候 . . . ?」

「何処の娘だかも知らずに手を出したのか?」

その問いに、アルディスはどきりとさせられる。見ていない様でいて、この兄は何時だつてこの自分の動向を把握しているのだ。それが癪でたまらない。まったく飼い犬の気分にさせられる。アルディスは、馬車の窓枠に頭を凭せ掛けながら梅し紛れに口の唇を噛んだ。

「近々、嫁ぐと言つていた」

「らしいな」

長い沈黙の後に呴かれた弟の言葉に、兄はごく自然な相槌を打つた。

「意に染まぬ男のものにされる前に、俺のものになりたかったんだと . . . 」

「ほう . . . 、それで情けをかけてやつたわけか? 優しいな、アルディス坊や。で、あの娘が嫁ぎ先で、お前によく似た子を産み落としたら、又おもしろいのだがな」

「嫌な冗談はよせよ」

「いや、これは冗談じやない。本氣で面白いと思つぞ」

「 . . . お前なんか大嫌いだ」

「ああ、知つてる」

エドキスは楽しそうである。

「まあ、あの娘とはこれつきりにしておいた方が無難だな」

「言われなくても、そのつもりだ、大体、会う機会だつてそういう無いだろう」

「さあ、それはどうかな……。お前は彼女の嫁ぎ先を知らないのか？」

「興味無い」

「全く……、お前は本当に帝家の間か？」

アルディスは訝し気な表情でエドキスを振り返つた。皮肉気な笑みを口辺に浮かべていたが、その口調は呆れたと言わんばかりであつた。

「第三皇子だよ」

予想だにしなかつた兄の返答にアルディスは口を開きかけたが、言葉など出て来る筈も無い。

「あのザヴィアス候の娘は、第三皇子の正妃として帝家に嫁ぐ予定だ。私達の義姉になる娘だつたつてわけだ」

「…………」

三番目の兄の婚礼の儀が年内に執り行われる予定であつた事は、無論知つていた。帝国貴族の娘を娶るという事も記憶にはあつた。だがそれ以上の事は、記憶していなかつた。興味も無かつたし、第三皇子との交流も殆ど無かつたのだ。

「その娘に、お前は兄上よりも先に手を出したつてわけだ。はははっ、こんな愉快な事はそう無いな。それを知つたら、あのボンクラ、何て言うか」

「そうだったのか……」

アルディスは溜息混じりに呟いた。

「どうだ？ 優越感を感じるか？ それとも罪悪感を感じるか？」

意地の悪い問い合わせに、だがアルディスは真面目に考える。優越感など微塵も感じてはいない。だからといって縁の薄い兄に対して罪悪感を感じているだろうか……？ そんな事は分からなかつた。ただ、これから嫁ぐ娘が、未来の義理の弟であるこの自分

などに恋をしていた事が愚かしく滑稽で、そして哀れだとしか感じられなかつた。

「何も……感じない……、ただ滑稽だとしか……」

「そうか」

再び顔を背けた弟に、エドキスはそれ以上言葉を続ける事はしなかつた。

半年余りの後、アルディスは兄の婚礼の儀式で、豪華な婚礼衣装に包まれたザヴィアス候の娘を目にして。第三皇子はエスニア公の称号を持つており、普段は帝国南部のエスニア州に居を構えている。それ故婚礼の後、兄の妃となつた娘は、兄と共にエスニア城へと旅立つて行つた。その後、義姉となつた彼女との間に何かがあつたかといえば、全くもつて何も起こりはしなかつた。あの日、あれほど大胆にアルディスを誘つた彼女は、兄であるエスニア公に嫁いだ後は、非常に貞淑な妻となつたらしかつた。年に幾度か顔を合わせる機会もあつたが、アルディスは、弟としての兄皇子の妃に対する礼儀を崩す事は無かつたし、彼女も又、義姉としての礼儀を崩す事は無かつた。ただ、アルディスへと向ける彼女の優しい瞳だけが、もしかしたら、何かを物語つっていたのかもしれない。

後の歴史家達は口を揃えて唱える。それがクルトニア帝国の転換期であつたのだと。長きに渡つて強大な力を持ち続けた帝国の終焉は、その時既に垣間見えていたのだと . . . 。

野営の準備の為に、兵達がここかしこで忙し気に動き回っていた。そんな中を青年が一人、ぶらりと歩いていた。青年の姿に気付き即座に姿勢を正す者もあれば、青年が脇をすり抜けるのに全く気付かぬ者もあつたが、どちらにしろその青年は氣にも止めはしなかつた。鎖帷子の上に着込んだチュニックの、金糸銀糸の豪華な刺繡が彼の身分を物語ついていたにも拘らず、青年は一人の供をも連れずに歩いていた。そんな事は珍しくも無かつたのであるう、青年の姿に気付いた兵卒達も、敬礼をするとすぐに又手を仕事へと戻す。

兵達の喧噪の間を擦り抜けると、青年はふと立ち止まり空を仰いだ。木々に切り取られた空は、黄昏の色に染まっている。彼は、適當な木の根元に腰を下ろすと凭れ掛かった。額にかかる団栗色の髪を掻き揚げ、影のある瞳を閉じた。

又一つ、国が滅びた。

皇太子シルキア公ロスシールド率いる帝国軍は、南国フェリスを攻め滅ぼした。恐るべき勢いと言えば確かにそうであったのだろう。帝国はこの終焉へ来て、まるで運命の女神シェリアスに抵抗しよう

とでもするかの様に、周辺諸国を蹂躪した。後世、帝国最後の皇帝と呼ばれる事になるスルターク五世の御代、この大陸の地図がどれ程塗り替えられた事であったか . . . 。

「殿下～つ！アルディイス殿下～つ！」

少女の様な高い声が己の名を叫んでいる事に気付き、彼は瞼を上げた。アルディイスは、木に背を預けたままふと微笑んだ。あの小動物の様な小姓は、あとどれ程でこの自分の姿を見つけ出すであろうか . . . 。アルディイスは返事を返す事も無く、再び瞼を閉じた。やがてばたばたと慌ただしい足音が近付いて来る。

「殿下～！」

やれやれ、ようやく見出されたかと思いつつ、アルディイスは片目を開けてこちらに駆けて来る瘦せつぽちな小姓を見た。

「もう . . . 、一言仰つて下さいっていつもお願ひしてますのに . . . 、突然姿を消さないで下さい、殿下」

眉間に皺を寄せて訴える自分付きの小姓の表情に、アルディイスは苦笑する。

「お前は過保護だな、レイク。俺がいない時は、お前も休めば良いだろうに . . . 」

「そんな分けにはこきませんよ、殿下」

「何故だ？」

「だって、殿下のお世話をさせて頂くのが、僕の務めですもの」「世話が必要な時は、二つしか言ひつか。取りあえず、お前も座つて休め」

「そもそもいかないんです。エドキス殿下が殿下の事を捜しておられましたので」

「そんなの、後でいいさ」

「そろはいきませんよ、殿下～！僕が叱られるじゃないですかっ！」

レイクの情けない表情に、アルディイスは再び苦笑を漏らす。やれ

やれと呴きつつ、アルディスは腰を上げた。

レイクを従え歩くアルディスの耳に、女の叫び声が聞こえた様な気がした。足を止めた主^{あるじ}に、少年レイクは不思議そうな顔を向ける。

「殿下？」

「聞こえたか？今の叫び声」

「えつ？」

アルディスは、足早に歩き出す。

「でつ 殿下！？」

レイクは慌てて後を追う。

間も無くアルディスとレイクは、兵卒達の天幕よりも気持ち大きな天幕の前に立っていた。女の叫びが再び聞こえた。こんな野営の場にあつて、果たしてそれは似つかわしくは無い声であつたのか。・それとも鬼気迫る女の金切り声はその場に似つかわしかつたのであろうか。・・・すでに騒ぎを聞き付け何事かとその天幕の辺りを取り囲んでいた兵達が、アルディスの姿に気付くと次々に道を空けた。アルディスが天幕の幕をはぐりレイクを従え中へと踏み込むと、暴れるうら若い女と、それを取り押さえようとしている者達の姿が目に映つた。

「殿下っ！お助け下さい！」

アルディスに気付いた侍女達が蒼白な顔で泣きついて來た。二人の衛兵に両側から腕を掴まれ叫ぶ女の手は血に塗れており、鋭い何かをきつく握り締めていた。恐らくは鏡の破片であろう、地面に敷かれた敷物の上に割れた手鏡が落ちている。

「好きにさせてやつたらどうだ？」

「アツ、アルディス殿下っ！？」

レイクが狼狽えた声を上げた。暴れていた女の動きが一瞬止まり、虚ろな瞳がアルディスの姿を捉えた。

「しつ、しかし、王女は自害を」

衛兵の一人が、実直そうな顔を困惑に歪めながら言つ。

「させてやればいいだろう、尤もそんなもんじゃ息絶えるまで長くかかるだろうがな」

侍女達が息を詰めて見守る中を、アルディスは王女へと歩み寄つた。

彼女の抜けた様な白い肌と濡れた濃紺の瞳、そして何よりその漆黒の髪は異国情緒に溢れていた。帝国に無惨にも攻め滅ぼされた南国の王女は、兄である第四皇子が娶る事となつていた。結局、北国メインデルトの王女との婚姻話が上手くまとまらなかつた第四皇子も、もう間も無く二十四の年を迎える。第四皇子はこの王女との婚姻と共にフェリス公の称号を貰えられる事になるだつ。

「放してやれ」

帝国の末の皇子の命に、王女の腕を捕らえていた衛兵の手が緩んだ。その事に戸惑つたのか、王女は身動きもしない。天幕の隅では、侍女達が蒼白な顔で手を取り合つたまま様子を伺つてゐる。

「どうした？自害したいんじゃないのか？」

感情の削ぎ落とされた皇子の声に、王女がびくりと身体を震わせた。その深く蒼い瞳に憎しみの炎が瞬いた。王女の華奢な身体が突然動いた。血に濡れた手が振り上げられたかと思うと、紅い色が散つていた。侍女達の甲高い悲鳴が再び起つた。

「殿下っ！」

レイクがアルディスに駆け寄つた。衛兵達の腕が再び王女を拘束していた。

「大丈夫だ、レイク」

「でも、でも」

血に濡れたアルディスの頬に、レイクは慌てて手巾を取り出して心配そうな面持ちで差し出す。アルディスは、素直に手巾を受け取ると無造作に頬を拭つた。拭われた血の下から紅い線が現れ、そしてそこから又血が流れ出す。

王女の憎しみに占められた瞳は、アルディスの頬を濡らす血を見

詰めていた。アルディスが促すと衛兵達は渋々と王女の腕を放し、ほんの数歩だけ下がつた。それとは反対にアルディスは王女に歩み寄ると、後退ろうとするその腕を取つた。

「放してっ！汚らわしいっ！」

「なら、その破片を離せ」

フェリス語で叫ぶ王女に、アルディスも又フェリス語で返した。アルディスに取られた細い腕に更に力が籠つた。鏡の破片をしつかりと握り締める小さな拳を染め上げている深紅は、その手首をも染め衣装の袖口をも染めている。そしてアルディスの手をも紅く染めた。

「あまりきつく握り締めると、手指の筋を切断するぜ。そうなれば手が利かなくなるだろう。利き手が物も握れなくなれば、自害するにも支障が出るだろうな」

抑揚の無いその言葉に、王女の手からふと力が抜ける。アルディスはもう片方の手で、そつと王女の掌を開かせると真っ赤な鏡の破片を取り上げ近くの衛兵に手渡した。

「水桶と薬を持って来い」

「はつ、はい、只今」

侍女の一人が弾かれた様に天幕を駆け出して行つた。

アルディスは手巾で王女の切れた掌を押さえながら、衛兵達も下がらせた。

「手鏡の小さな破片で死ねると、本気で思ったのか？」

アルディスは、王女の掌を水で洗つてやりながら尋ねた。手桶の中の水は立ち所に真っ赤に染まつた。王女は答えなかつた。アルディスは答えを待つでも無く、侍女の差し出す清潔な布で王女の手を拭き取つてやる。

「まあ、急所さえ心得ていれば死ねない事も無いがな・・・。だが女の腕じや時間がかかるだろ？よ。事切れる前に発見されて、助けられるのがおちだ」

王女は、俯いたまま悔し氣に唇を噛んだ。

「がつかりするな。他にも死ぬ方法なんて探せばある」
王女の口から小さな呻きが洩れた。消毒液が沁みたのであらう。
決して優しい手付きでの手当では無い。

「例えば、敷布を切り裂いて縄を縒つて首を括るとか、酒を被つて『』の身に火をつけるとか 一目と見られない屍骸が出来るだろうがな」

「殿下、お止め下さりませ、そんな恐ろしいお話は 。王女殿下がそれを実行に移されたら何となさるのです?」
年配の侍女が泣き言を訴えた。

「困るのか?」

「当たり前でござります! 王女殿下は、エドキス殿下のお妃となられるお方でござりますよ」

「王女にとっちゃ、されば辱だらう。殺してやつた方がよっぽど親切つてもんだと思うがな」

俯いていた王女が吃驚した様に目を見開いてアルディスを見た。
アルディスは血の滲む王女の掌の幾つもの傷に薬をすり込むと、器用に包帯を巻き始めた。

「殿下 、陛下のお決めになられた事にござります」

侍女の心配そうな低い声に、アルディスの手が一瞬だけ止まる。

「分かっている。フェリスを穩便に支配するには、王女の身柄が必要だ。そんな事は分かっている」

王女の手に包帯を巻き終えると、アルディスは徐に立ち上がった。
その瞳は王女へと向けられている。

「だが、替えの王女なら他にもいる。お前が死ねば、僧院に送られる筈の妹姫が代わりを務める事になるだろう」

そう言い残すとアルディスは去つた。残された王女は、やがて肩を震わせ嗚咽を漏らし始めた。

「フェリスの王女が騒ぎを起こしたそつだな」

「ああ」

簡素な夕食を取りながら、エドキスが思い出したかの様にアルティスに尋ねた。

「それは、そのせいいか?」

エドキスの色素の薄い瞳が、アルティスの頬の絆創膏を捉えていた。

「ああ」

「許せんな」

「大した傷じやない、レイクが大袈裟にしただけだ」

エドキスは忌々し気に溜息を吐くと、銀杯を傾けた。

「亡国の王女など父上が娶れば良い物を . . . 何故、私なんだ .

・

「そんなの、良い年をしてまだ独身だからに決まってるだろう」

「くそつーその辺の帝国貴族の娘あたりで手を打つてくれれば良い物を . . .」

「正室腹の皇子じや、そうもいかないんだろ、諦めろよ

「可愛く無いな、お前 . . . 人事だと思って . . .」

エドキスは、不機嫌にアルティスを睨む。

「可愛い年頃でも無いさ」

もくもくと食事を続ける末の皇子も十九になり、その顔立ちからは幼さも大分消えた。エドキスが、小さな溜息を洩らすのが分かつた。

「お前が女だつたらな . . .」

ぱつりと呴かれた言葉に、アルティスは食事の手を止め怪訝な顔を上げた。

「. . . 何故だ?」

「お前が女だつたら、かこつめ匂い女にでもしたのにな」

「なつ！？」

アルディスは氣色ばんだ。

「誰にも見せずに大切に囮つて、政略なんぞに使われない様、早々に子の一人でも産ませてな」

「氣色悪い事言つなつ！怒るぞつ！」

「もう怒つているだろうが？坊や」

エドキスが口を歪めて意地悪く笑う。

「大体、俺が女だつたとしたつて、お前とは血が繋がつてるだろうが！？近親相姦だぞ」

「この帝家にあつて、そんな罪は取るに足らないだろう？過去を見ろ。親殺し子殺し、兄弟殺し、伴侶殺し、どれだけの大罪が重ねられて來たと思つてるんだ？」

皮肉気に笑うエドキスに、アルディスは珍しくも思い切り顔を顰めた。

「だからつて氣色悪い事言つな、くそつ」

「お前が女だつたら、さぞかしルヴィーラ姫に似て愛らしかつただろうにと思つただけだ」

結局はそこなのかと、アルディスは無言で息を吐く。

エドキスが亡国の王女を娶る事を極端に厭つ理由を、アルディスは知つていた。それが己の母のせいである事をアルディスは知つていたが、何も言えなかつた。言つたところで、どうにもならないのだ。

『お前も私も、所詮は帝国の駒でしか無い』

アルディスは、エドキスが以前言つていた言葉を思い出す。確かにその通りだと強く思う。意に染まない女を娶れと言われば、娶るしかない。仮令、皇太子に次ぐ帝位継承権を持つエドキスであろうとも、それは変わらないのだ。

夕食を終えた頃、ブラコフ・ダウゼント侯が姿を見せ、エドキスに何やら耳打ちをした。

「妹姫が？」

興味も無さそうに尋ねるエドキスに、候は頷いた。

帝都へと護送中のフェリスの王女達、その歳若い妹姫がその晩高熱の為に倒れ、そしてほんの数日後に呆氣無く息を引き取つた。元々身体の弱い姫であつたらしく、あまりにも呆氣無く息を引き取つてしまつたのだ。その旨は姉姫の耳に入れられたが、彼女は只呆然自失し、がっくりと頃垂れたまま侍女達に抱え上げられるまで身動き一つしなかつた。

亡国の王女が再び自害を図つたのは、妹姫の死の翌晩の事であつた。

アルディスは王女の天幕の中にいた。寝台に横たわる王女の首の白い包帯が目を射る。昨晩王女は、敷布を裂いて首を括りうとしたという。

「呆氣無く失敗したな」

王女は無表情なアルディスの顔へと虚ろな瞳を向けた。敷布で縄を繕ろうとも、こんな天幕の中で首など括れる筈も無いのだ。それでも王女はそれを実行に移し、夜更けに天幕を半壊させたのだ。王女は、その日の内に寝台の中で舌を噛み切った。

「又か？昨日の今日ではないか」

エドキスは、眉間に深々と皺を寄せた。

「発見が早かつたのですぐに止血致しましたが、恐らく満足に口をきく事は最早……」

「だらうな

第四皇子の冷たい反応に、側近のブラコフは口を噤む。

「明日は予定通り出発する。妹姫の一件といい、あの姫の騒ぎといいで帰還が遅れている。これ以上遅らせるわけにもいかん」

「御意」

ブラコフが辞すると、エドキスは銀杯に葡萄酒を注ぎゆっくりと傾けた。アルディスは先程から、いるのかいないのか分からぬ態でエドキスの寝台に寝そべつたまま黙りこくっていた。

「舌を噛み切つて死ねるとでも思つていたのか、愚かな姫だ」

「あの監視の中じや、自害を試みる端つから見付かるだろうだつた。それこそ真夜中にでも舌のかわりに己の手首でも噛み切つて

・。され成功したかもしれないのにな . . . 」

「縁起でも無い事を言つな。死なれたら実際厄介だ」

「戦利の姫を娶るのは、嫌なんじやなかつたのか？」

「ああ、虫酸が走る程嫌さ。だが政なら致し方無かひつ？」

「 」

戦で滅ぼした國の血筋を娶る事は、その時代ごく普通に行われた事であつた。そうしてその亡國の正統な支配権を主張し、亡國の民の感情を何とか和らげよつとしたのだ。だが、戦利の証とされる姫君達にとつては血を吐く程に辛い事である。一族を死に至らしめた男のものにされ、子を産む事を強要されるのだ。アルディスの中で、女の狂氣を帶びた呪詛の声が甦つた。この自分を産み落とした女の気の触れた声が、帝家の血を引く息子に向かつて帝家の血を呪う。そんな母を哀れみこそすれ、怨んだ事など一度も無い。あまりに弱過ぎた母は、いつも簡単に己の世界へと逃げ込んだ。

王女の為に馬車の中には俄造りの寝台が設えられた。王女は移動の間中その寝台に横たえられ、野営の天幕が張られると衛兵に抱え上げられて天幕の寝台へと移された。

アルディスの足は、何となく王女の天幕へと向かつていた。王女は目覚めているといつので中へ入つてみると、寝台の傍らにいた侍女が彼に頭を下げ、王女が薬湯を飲まないと言つて困惑顔で訴えてきた。

「何故飲まないんだ？飲まなければ死ねるとでも思つてゐるのか？」

横たわる王女は、アルディスを見ようともしなかつた。

「噛み切つた舌の痛みが長引くだけだろうに・・・死に結びつく程のもんじや無いと思うがな。そもそも、舌を噛み切つた位で死ねるとでも思つたのか？」

王女がぴくりと反応し、僅かに顔と瞳だけを動かしてアルディスを見た。恐らく死ねると思つたのだろう。

「浅はかだつたな。舌を噛み切つた位じゃ人間は死ねない。只、満足に喋れなくなるだけだ」

王女の唇が震え、悔し気な瞳からは涙が溢れた。アルディスは寝台に歩み寄り腰を下ろすと、王女を抱き起こした。彼女は嗚咽を苦し気に堪えながら、弱々しく抗つた。

「取りあえず、薬湯を飲んだらどうだ。拒むなら口移しで無理矢理飲ませるぞ」

言いながら寝台脇のテーブルから薬湯の椀を取つて王女の前に翳すと、王女は泣きながらその椀を取つて口を付けた。ほんの一 口程飲み下すと、王女は嗚咽を堪えきれなくなつたのか、寝台に突つ伏した。アルディスは椀を傍らの侍女に手渡すと、王女の震える肩に掛布を掛けてやつた。

その翌日、アルディスは一行と共に森の中で馬をゆるく駆けさせていた。すぐ傍らにはレイクが馬を走らせていて。エドキスとブラコフは、ずっと前の方にその背を見て取れる。木々の間を縫つて陽が差し込んでいるその処どころに、鮮やかな蒼い花が咲いていた。アルディスは先程から横目にその花々を眺めながら馬を駆けさせていた。恐ろしく鮮やかな、目を引く色であつた。その毒々しい色はアルディスの目前に、フェリスの王女の身も心も憔悴し切つた顔を

散らつかせる。あの花を人知れず贈つてやつたら、あの王女は喜ぶのだろうか 。いや、恐ろしい苦痛を伴つ死を怨まぬ筈が無いだろう 。

昏餉の休憩の為に馬車が止められた。

「さあ姫様、少しあ外の空氣をお吸いなされませ」

侍女の一人がそつと声をかけると、沢山のクッショーンに身体を預けていた王女は、微かに頷き半身を起こそうとした。侍女達はすかさず手を貸し、王女を抱き上げる様にして馬車から助け下ろすと、すでに表に用意されていた敷布のクッショーンの上に王女をそつと座らせた。無骨な軍兵達の目からこの異国の王女を隠す様に、辺りには申し訳程度の布が張られていた。

王女は、無言のままその身に許された景色を眺めていた。紺碧の瞳の辿るのは、鮮やかな蒼色の嶄やかに揺れる美しい花であった。間も無くして舌の半分を失つた王女の為に調理されたスープが運ばれてきた。すでに冷たく冷まされている。舌の傷の完全に癒えない王女には、固形物も、ましてや熱いスープも拷問でしか無かつたであろう。王女は、殆ど味のない冷めたスープを年配の侍女に促されるままに、素直に口にした。舌を無くした為に、時折口の端から零しながら 。

「ようお召し上がりになりました、姫様。上出来ですよ。何ぞ甘い物でもお持ち致しましようか?」

珍しくスープの半分以上を胃の腑に納めた王女に、侍女達は破顔して尋ねるも、王女は静かに微笑み微かに首を横に振つた。そして王女はぎこちない仕草で立ち上がつた。

「姫様? 如何されました?」

慌てて王女に手をそえる侍女に、王女は片手を上げて鮮やかな蒼い色を指し示した。

「あの花々をご所望ですか?」

歳若い侍女の間に、王女は微笑みと共に頷いた。侍女達はその花の元に敷布とクッションを移してやると、王女をそっとその場へ座らせてやった。

「まあ、綺麗な花です」と。帝国では見た事も無い花だわ
「真に . . . 、わたくしも初めて見ました。何て鮮やかな色なのでしょう」

「姫様のお国では、『よく普通に見られる花なので』『やこましようか? なれば幾株か持ち帰つて、帝都にも咲かせましょうか? もしも姫様のお気持ちをお慰め適うならば . . . 」

指先でそれらの花を愛でながら、王女は微笑み頭を横に振つた。

「真で『やりますか? 姫様の漆黒の御髪^{おぐし}には、その鮮やかなお色はとても映えますのに』」

一番年若な侍女が笑顔で言ひ、「手をつこと伸ばしてその花を數本手折ると、まとめて王女の黒髪の元にそつと翳した。背に垂らした王女の張りのある絹糸の様な黒髪に、その鮮やかな蒼い色は確かに良く映えた。

「まあ、真に良くお似合いであります」と。姫様の艶のある黒い御髪^{おぐし}には、大抵の色は映えましようとも、殊、鮮やかな蒼い色の何とお似合いになる事でしょう」

「やはり幾株か持ち帰りましよう。こんなに愛らしいお花ですもの。まるで一つ一つのお花が小さな鐘の様ですわ。帝都に着いたらエドキス様にお願いして、早速この様な色のお衣装を譲えて頂きましょう。そしてこのお花を御髪に飾つたら、せぞかしお似合いでありますわ、姫様」

敵国の女達の言葉に、口を開かぬ王女は微笑むだけであった。

やがて侍女等が立ち上がり出立の為の準備を始めた時、亡国の王女は侍女等の目を盗んで件の蒼い花を懷に隠した。

その晩、アルディスはいつまでも寝付く事が出来なかつた。脳裏に散らつゝのは、あのフェリスの王女の哀れな姿ばかりであつた。鏡の欠片の深々と食込んで深紅に染まつていた掌・・・、細い首にくつきりと残つた赤黒い縄の後・・・、そして・・・、舌を噛み切り言葉を失つた絶望の表情。出来る事ならば死なせてやりたかつた。フェリスの王女としての誇りと共に、死なせてやりたいと思つた。

アルディスは観念して暗闇の中を起き上がつた。傍らの愛剣を手に取り天幕を出ると、眠そうな衛兵達が咄嗟に居住まいを正した。

「眠れない。その辺を散歩して来る」

「なつ、なれば殿下つ。お供仕ります」

「必要無い、すぐに戻る」

「しかし、こんな夜更けです、殿下。何が起こるか分かりません故、それに、その様なお姿では・・・」

アルディスは鎧帷子も着けてはいない姿である。寝ずの衛兵達が良い顔をしないのも当然と言えば当然であろう。

「好きにしろ」

アルディスは小さな溜息と共に言つて、何処へとも無く歩き出した。野営の篝火が所々に燃えていた。エドキスの天幕を守る兵達が、アルディスの姿に気付き姿勢を正す。これと言つて驚いた態でも無かつた。第五皇子の気紛れなど別段珍しくも無い。取りあえず後ろに一人の兵達が付き従つているのを見て、口を開く事は差し控えた様である。

アルディスは長剣を片手にぶらりと歩き、やがて足を止めて木々に切り取られた夜空を眺めた。月が明るく、星が瞬いていた。

「明るいな・・・」

「ぱつりと呴いてみた。

「はい、今宵は満月です故、殿下」

兵の一人が朗らかに答えた。

「そうか . . . 、そつ言えばそうだつたな」

「月^{アガイエス}が瘦せ細る頃には、帝都ですね、殿下」

その言葉に、アルディイスは氣の無い返事を返す。

「嬉しく無いんですか？ 殿下」

「いや . . . 、そんな事は無いが . . . 」

微かに驚く氣配を見せた兵達に、アルディイスは言い淀む。本心では、嬉しいなどとは感じられなかつたのだ。このまま何処かへ出奔してしまいたい氣もする。總てをかなぐり捨てて、何処か遠くで傭兵家業でもしながら氣ままに暮らすのも良いかも知れないと、幾度考えたかしれない。それを実行に移さないのは何故だろうと、アルディイスは改めて考えてみる。エドキスのせいであろうか . . . 。

「お前達には、故郷^{くに}に待たせている者達がいるのか？」

アルディイスが、何とはなしに尋ねてみると、二人とも嬉しそうに頷いた。

「女房と、六歳になる息子があります」

「私は、母と妹が」

「そうか . . . 、さて、お前達の帰還を首を長くして待つてゐるんだろうな」

アルディイスは微かに微笑んだ。

そんな夜更けの和んだ雰囲気を突如、女の甲高い悲鳴が遮つた。

三人の男達は、同時に息を呑んだ。真つ先に駆け出したのはアルディイスであつた。フェリスの王女が、又自害を企てたのだと確信した。

「御医師をつ！ 早うつ！！」

王女の天幕の前で、侍女が叫んでいた。駆けつけたアルディイスは、その侍女の腕を荒々しく掴んで問い合わせた。

「姫様のご様子が、ご様子がつ！」

動転する侍女の言葉は、要領を得ない。アルディイスは素早く王女

の天幕に飛び込み、獸脂の蠅燭の灯りに浮かび上がるその光景に目を見開いた。寝台の上の王女は、酷く悶え苦しんでおり、白い夜着の胸元や袖口、そして掛布に紅い色が散っていた。両側から侍女達が叫びながら、酷い苦しみ様の王女の背を必死に擦っていた。

アルディスの詰問に、しかしこの一人の侍女等も同様に動転しており、年若な侍女の方は既に泣き出していた。アルディスの脳裏に、昼間見たあの鮮やかな蒼が思い浮かんだ。

「どう!

アルディスは一人の侍女達を押しのけると、王女の身体を後ろから掴んだ。

! !

血相を変え叫びながら、苦しむ王女の血を垂れ流す口に己の指を
つつこもうとしたアルディスに、突如王女は抗つた。弱つた王女の、
死の苦しみの中の王女の、何処にそんな力が残つていたのか・・・。
呼吸もままならぬ態で血反吐を吐きながら、王女は苦しみに濡
れた濃紺の瞳でアルディスを見上げ首を振る。その口が不明瞭な音
を紡ぐ。

王女は、ぶるぶると痙攣する腕を伸ばしてアルティスの胸元を掴み、縋り付く。

「女の紅く染まつた口は、それらの音を幾度か紡ぎ出すると、再びふりと血反吐を吐き出した。

シナセテ · · · · · オネガイ · · · · ·

寝台の隅に、あの花の茎と毒々しい鮮やかな蒼い花びらの欠片が落ちていた。南国では、珍しくも無い毒花であった。俗に“シェル

シアーダ（美の女神）の吐息”との名で呼ばれるその猛毒花は、あまりの苦しみをもたらす為に、フェリスなどでは極悪人の処刑に用いられるという毒花である。その事をフェリスの王女が知らぬ筈は無かった。全身を炎で焼かれるよりも尚恐ろしい苦しみを味わう事になると知りながら、王女がそれを飲み込んだのかと考えたらアルディスはいたたまれなくなつた。敵の胸に縋り付きながら、死を懇願する王女が哀れであつた。身も心もぼろぼろになり、血反吐を吐き散らしながら呼吸も満足に出来なくなつてゐる王女が、あまりに哀れであつた。アルディスの片腕は、酷く痙攣してゐる王女の肩を抱き寄せていた。

「分かつた……今すぐ楽にしてやる……」

アルディスは王女の耳元に囁くと、苦しむ王女をそつと寝台に横たえた。その時、彼の瞳から零が一滴王女の頬に落ちた事に、彼自身気付いていたであろうか……。そして彼は剣を抜いた。アルディスに付き従つていた兵等が仰天して声を上げたが、アルディスは聞き入れはしなかつた。この王女を殺す事によつて生じるであろう問題など、どうでも良かつた。咎めを受ける事にならうが、かまわなかつた。ただ哀れな王女を、これ以上苦しませるのが忍びなかつたのだ。アルディスは王女の急所を定めると一気に貫いた。侍女が一人、氣を失い倒れ込んだ。

王女は心の臓を一撃に貫かれ一瞬の後に動かなくなつた。ただ、その口元が確かに、“ありがとう”という形に動いたのを、アルディスは見逃しはしなかつた。

フェリス王女殺害について、アルディスは何の申し開きもしなかつた。エドキスに状況を説明したのは、王女に付けられていた侍女

達と、アルディスに付き従つていた二人の衛兵達であった。

「全く・・・、お前には呆れる。王女を哀れんで殺したか？滅ぼした國の者達を、いちいち哀れんでどうする？馬鹿者が！」エドキスは声を荒げる事はしなかつたものの、苦々し気な表情で弟を詰つた。

「いつまでそんな“甘ちゃん”でいるつもりだ？」

アルディスは、一言も発する氣は無いのか、ふいっとそっぽを向いた。エドキスは苛立し気に息を吐いた。

そして、月の女神アライエスの姿が細くやせ細つた頃、エドキス率いる軍隊は帝都に帰還した。

フェリス王国の姉姫の死の真相は、エドキスにより巧妙に隠され、毒花摂取による自害として片付けられた。エドキスは、事の真相を知る者達に対し箒口令を敷いていた。

『事の真相が洩れた時には、お前達全員の命は無い物と思え』

第四皇子の酷薄な瞳に睨みつけられた三人の侍女達と二人の衛兵達、そして医師達は、文字通り震え上がった。帝家の皇子達の中でも一番残虐な氣質を持つ皇子として怖れられている第四皇子である。事が洩れれば、本当にその場にいた者達は皆消されるのだろう。口封じの為にその場で消されなかつただけましであると、その場の誰もが考えた。

帝都帰還後、三人の侍女達はその責任を問われ謹慎処分に処されたが、その内の一人は精神的な打撃が大きかつたらしく、そのまま城を辞した。

クルトニア帝国滅亡の、僅かに一年前の出来事であった。

十五になる帝家の末姫は、白っぽい金髪に翡翠色の大きな瞳をした、中々に愛らしい姫であった。物心付く前に母を亡くしていたが、父である皇帝には溺愛されて育つた。末姫以外の七人の子等に対し、この皇帝が父親として接した事など皆無に等しかったというのに……。龍姫の産んだ娘だからか、それとも皇帝も年老いたという事なのか……、娘を愛でる皇帝の姿に、周りの臣達は影でそのように取り沙汰する。

だが実際に末姫は、幼い頃より人見知りをする事も無く誰にでも可憐な笑顔を振り撒いたので、多くの者達に愛された。

「エドキス兄さま、アルディス兄さま」

兄弟の私室に、愛らしい顔がひょっこりと現れた。長椅子で私的な書簡に目を通していったエドキスは、溜息を一つ零して妹の顔へと目を向けた。

「またお前か。何の用だ？」

にこりともしない兄に、それでも末姫ラモーナは屈託無い笑顔を見せる。

「この処、ちつともお会い出来ないから、来てしました」

窓辺の長椅子に足を投げ出して本を開いていたアルディスは、微かに笑みを見せていたが、エドキスはと言えば、苦々し気な表情に拍車をかけたまま再び手元の書簡に目を落とす。

「十日程前に、会つたと思うがな」

「あら、十日も前よ、エドキス兄さま。しかも歩廊ですれ違つた

だけですわ

「充分だ」

エドキスの冷たい言葉に、ラモーナの愛らしい笑顔が微かに翳る。

「たまには一緒に夕餉をと思って、お誘いに来たのよ、お兄様方」

「お前はいつも陛下と共に夕餉を摂るだろ？」「が」

「ええ、だからお父様もよ」

「冗談だらう……」

エドキスは、年齢よりも幼く見える妹の笑顔を見上げた。

「お前は、本当に帝家の人に間とは思えないな、末姫」

ラモーナはきょとんと首を傾げた。

「私達に、家族の真似事でもしろって言うのか？」

「エドキス」

エドキスの棘のある言葉を、アルディスが咎めた。

「陛下の夕餉の相手は、お前一人いれば充分だ。その方が陛下も

喜ぶさ

「エドキス兄さま……」

「用が済んだなら出て行け。それから、十五にもなつて供も連れずに男の部屋にすかずか入つて来るんじゃない。分かつたな、末姫」

「…………はい…………ごめんなさい、兄さま……」

ラモーナはしゅんと萎れて、とぼとぼと部屋を出て行つた。その背を見送りつつアルディスは立ち上がり、エドキスを睨んだ。

「どうしてお前は、いつも末姫に冷たいんだ？」

「私は、ガキが嫌いなだけだ」

「…………」

悪びれもせずに答えるエドキスを忌々しく思いながら、アルディスは素早く身を翻すと妹を追つて部屋を出て行つた。

哀れな程がつくりと肩を落として歩いているラモーナを捕まえると、アルディスは小さな肩を抱き寄せた。

「気にするな、ラモーナ」

「エドキス兄さまは、私の事がお嫌いなの？」

泣きそうな顔で見上げて来るラモーナが哀れになる。

「エドキスは、ああいう性格なんだ。誰にでもああだ。お前にだけじゃないから、気に病むな。部屋に来たかつたら、好きな時に来ていいんだぞ。エドキスが何か言つたら、俺が来いつて言つたって言え」

アルディスに頭を撫でられ安心したのか、ラモーナ姫は笑顔を取り戻した。アルディスは、妹姫の屈託も無い話に合づちを打つてやりながら部屋まで送り届けると、自室へと戻った。

アルディスが部屋へ戻ると、エドキスが皮肉気な瞳を容赦無く向けて来た。

「又、部屋まで送つてやつたのか？」

「ああ」

「全く、甘やかし過ぎだ。十五にもなりながら、まだてんでお子様じやないか。あんなんで、政略の材料になるか」

「いいじやないか、あれはあれで可愛い」

「やれやれお前まで、呆れたもんだ」

「もう少し、優しくしてやつてもいいんじゃないのか？泣いてたぞ」

「無理だな、私はあの姫が嫌いだ」

だが、その理由をエドキスは口にはしなかった。アルディスもそれ以上は何も言わず、ただ溜息を吐いたまま先程の本を手に取ると、長椅子に戻つて再び繕き始めた。

夕暮れ時であつた。独りになりたくて、供も連れずに彼は帝城の広い敷地内を歩いていた。昔よく通つた早道を選び、懐かしい場へ

と辿り着いた。

長らく使われる事の無かつたその離れの館は、うらぶれた感が否めなかつたものの、そのこぢんまりとした庭園だけは、驚いた事にあの頃と変わらず、今でも美しい花々が処狭しと咲き誇つていた。まるで、あの頃に時が戻つてしまつたかの様な錯覚さえ受ける。

初めてあの儂気なシルキアの姫に出会つた日の光景が、エドキスの脳裏にまざまざと甦る。あの細い歌声が、哀し気な旋律が、甦つた。シルキアの姫が亡き人となり、彼女の忘れ形見を自分の手元に引き取つてからは、ついぞここへ来る事は無かつた。あれから十年以上の月日が流れた。未だ自分はあの姫の面影に囚われているのかと思つたらおかしくなり、エドキスは独り自嘲的な笑いを漏らした。ふと末姫の事が心に浮かんだ。なぜ冷たくするのかと、アルディスに詰られた。誰あろうアルディスに責められた。確かに子供じみた真似である事は自覚している。末姫に罪は無い。罪深いのは父である皇帝だ。もしも・・・とエドキスは考える。もしも皇帝が末姫と末姫の母を思う心の内の五分の一程でも、ルウイーラとアルディスを気遣つてくれていたら、ルウイーラは気が触れる事も無かつたかもしれないと・・・。だがそれも、今更口にしてもせんない事だ。

エドキスは、時折花に触れながら歩いた。

ここ数年、大陸には再び不穏な空気が流れっていた。その一端を担つていたのは、無論この帝国であったのだが・・・。

（又、戦が起きるのだな・・・）

皇帝は、以前から北国メインデルトの地を手に入れたがつていた。その為、メインデルト王女とエドキスとの政略的な結婚が画策されて来たのだが、メインデルトはあの手この手でそれを拒み続けた。それ故エドキスは、二十五を過ぎて尚、一人の妻も娶つてはいなかつたのである。

東の地で戦の避けられない事変が起ると、帝国からも再びのんびりとした風潮は拭い去られた。皇帝が今日明日にでも、メインデ

ルトへの遠征を命じたとしてもおかしくは無くなつて來ていた。そして侵略の曉には無論、王女はエドキスが娶らされる事になるであろう。

「冗談では無い」

エドキスは、吐き捨てた。

「ルウェイーラ姫と同じ境遇の姫など、冗談にも程がある」知らず知らずの内に、手が近くの花を驚掴みにしていた。皇帝が正式に命を下したとしたら、自分は従うしか無いだろう。それとも國も身分も捨てて、何処かへ逃げるか . . . たかが、意に染まぬ婚礼の為に総てを捨てるなど、馬鹿馬鹿しい。

独り苛立ちながら花を握り潰していると、ふと人の気配を感じた。エドキスは不思議に思い振り返ると、恐らくは庭師であろう、年老いた男が庭ばさみとバケツを手に現れた。庭師の方でも、ここに誰かいるなどとは予想していなかつたと見え、エドキスの姿を認めるに酷く驚いた様子で慌てて深々と頭を下げたが、まさか皇子だとは思わなかつたのだろう、さっさと己の仕事に精を出し始めた。エドキスは暫くの間、その庭師の様子を田で追つていた。雑草を抜き、涸れた花を摘み、植え込みの伸び過ぎた部分を綺麗に刈り、庭師は黙々と働いていた。

「主のいないこの庭園を、お前はずつと世話をしてきたのか？」

突然話しかけられ、庭師はびっくりした様に顔を上げた。そして、

“はい”と頷き答えた。

「何故だ？ 愛する者もいないのに」

「主がおらなんども、愛する方がおらなんども、花や植木達には罪はございません。ここに植わっているなら、世話をしてもやあ、可哀想です」

「 . . . そとか . . .

エドキスは、微笑んでいた。それは、いつもの彼特有のあの皮肉を帶びた笑みなどでは無く、滅多に人に見せる事など無いであろう、

純粹な微笑みであった。

「お前に礼を言おう。この庭園をずっと世話してくれて、本当に
添い」

それは、彼の心からの言葉であった。庭師は、顔をくしゃくしゃにして笑顔を見せるが、再び深々と頭を下げる。

北国メインデルト遠征の件が決議され、皇帝が正式にエドキスに命を下したのは、それから数日後の事であった。

「こうなるとは思っていたが、こんな時期に、よりによつてメインデルトとは、鬼の様な父だな」

アルディスと共に私室へ戻るやエドキスは軽く毒突いた。

「メインデルト……」

アルディスは、ぽつりと呟いた。

（よりによつて、メインデルトとは……）

彼の脳裏に、金色のふわふわの髪をした幼い少女の面影が甦った。

「でもって、あの王家の男子を一掃した暁には、私にあそこの王女を孕ませる権限が与えられるつてわけか」

エドキスは、皮肉気に口を歪ませ、低く笑つた。

「全く冗談じゃない。あそこの王女は、男装で剣を振り回す様な姫だと聞いている。いつ寝首をかかるか分からぬじゃないか」

エドキスは、一つの銀杯に葡萄酒を注ぐと片方を弟へ手渡した。

アルディスは、杯を受け取ると、長椅子に座り背を預けた。

「侵略して滅ぼしたら、エドキスが王女を娶るのか……」

アルディスは、まるで独り言の様に呟いた。

「ああ、攻め滅ぼす事が出来たらな。すると私は、お前の母と同じ境遇の女を妃にしなければいけなくなるわけだ」

「何故王女の後見人が俺なんだ？ 何の力も無い俺を付けて、何の

意味があるんだ？」

「戦利品に力ある後見人など必要無いって考えだろう、お前の母
がそつだつた様に . . . 」

エドキスは皮肉気な笑みを浮かべたまま、アルティスから田を背
けた。

その後、間も無くして、兄弟は軍を率い帝国を後にする。一度と
故国へは戻れぬ事も知らず 。

2 · 帝国 の 皇 子 達 終

3・第四皇子の独白～ヒュローグ

父である皇帝から、北国メインデルトへの遠征の命が正式に下つてから、アルディスの様子が少しおかしい。もともと口数も少なく、笑顔を見せる事も少なかつたが、この処頗に沈んでいる。その彼の微妙な変化に気付く者は、恐らくは他にいまいが、生まれた時から彼を見て来た私の目は、『まかされはない。戦を前にして気が張つて』いるというのも違つ。そもそも初陣でもあるまいし、あのアルディスがその為に緊張するとも思えない。一体何があつたのかは、分からぬ。尋ねたところで、あの頑な弟が、私に理由を話すとも思えない。

季節はもう、夏を終えようとしているといふのに、父は我々に冬の厳しい極北のメインデルトを早急に落とせと言つ。そして私にその国の王女を娶る様に命じた。ここへ来て尚、父は私にかの国の王女を妻めあさせたいのかと思うと無性に腹が立つて来る。しかも国を滅ぼしてから王女を手に入れると言つ。

私は、ふと考へた。もしもメインデルトが落ちたら、アルディスは又いつかの様に戦利品とされる王女に手をかけるであろうか……。父は激怒するであろうが、私はそうなろうとも構わないと考える。敵国民の感情を逆撫でする事になろうとも、構うものか……。戦に憎しみは付き物である。アルディスが戦利の証とされる女達を死なせたがる気持ちも分からなくは無い。彼の母であるルウェイーラ姫の境遇を思えば、それは当然とも言える事なので

あれ。

ルウェイーラ姫の呪詛の言葉 。気の触れた己が母親の、己が父を呪つ言葉を聞きながら、あの哀れな弟は成長したのだ。

願わくは、将来彼の妻となる女が戦利の証などでは無い事を私は切に祈る。私の望みは、ただそれだけである。そう . . . 、只それだけなのである 。

帝國の皇子達 終

3 · 第四皇子の独白～エピローグ（後書き）

こんな陰気な話に最後までお付を仰こ下せられた皆様、本当にありがとうございました。

今度は明るい話を書きたいものです。などと思つてみても、性格
が陰気なせいか、物語も陰気になってしまいましてですね、やれや
れ・・・・・。

それでは皆様の御幸運を祈つて · · ·

秋山らあれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346d/>

帝国の皇子達

2010年10月11日23時19分発行